綾子の割礼・第二話　　『割礼の記憶』

魔衣

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

綾子の割礼・第二話　『割礼の記憶』

【Ｎコード】

Ｎ４５３７ＢＲ

【作者名】

魔衣

【あらすじ】

以前書いていた綾子の割礼の続編です１９世紀ごろの南アジアの某国を植民地にしていた国で現地の支配層であった階級の姉弟が反乱がおきて現地の民の復讐で姉は割礼され弟は去勢される話

始まり（前書き）

砂漠のオアシスの後宮で１５０年前の日記が発見された。そこにはにある美しい欧州人の姉弟の悲劇が…

始まり

綾子は、物音で目を覚ました。
ここは某砂漠のオアシスに築かれたハーレム。
ダンダン！「綾子さま！」ダンダン！「綾子さま！」部屋の扉を、主の名を呼ぶ元気な声がする。綾子は昨晩遅くまで少年王に請われて『子作り』させられていた。今や唯の奴隷でしかない綾子にそれを拒否する事など出来ない。

「ダンダン！「綾子さま！」ダンダン！「綾子さま！」
（もう、疲れてるのに・・・）
昨夜、複数の宦官と３人の自分の娘たちが見守る中。女ざかりを迎えた体を、まだ精通が来ていくばくも無い少年王に攻め立てられ、涙を流し雄叫びの様嬌声を張り上げていたのである。（あと少しだったのに・・・）
綾子とメイド達は、捕らえられてしまい女奴隷としてハーレムに入れられてしまった。奴隷としての教育を受けさせられ、その最後の仕上げに、この国の慣習である、『割礼』と言う恐ろしい儀式を強制的に受けさせられた！！

そして、女の一番敏感な部分である陰核と小陰唇を麻酔無しで切り取られてしまった。
切られる瞬間はもちろん、その後、傷が癒えるまで地獄の苦しみを味わったのだ。

敏感な部分を失い、おいそれとイクことの出来ない身体にされた事をうらめしく思う。
「む、紫牡丹ぅ・・・綾子ぉ、も、もう我慢できないぃぃ、出すぅ、

よぉ！」
綾子は少年の背中に指を突き立て、東洋人にしては長いがやや脂肪の多い太腿を王の腰に巻きつけていた。「へぇっい、かぁぁ、まだ、後、すこしです！」あと少しで割礼の儀式以来一度もイっていない、性欲もてあます女盛りの身体は、天に飛び立つ事が出来る。あと少し・・・。だが
「ワダジバぁ！紫ぃ牡丹はこわｒｗｓｒｆｔｇ」王の唇が綾子の唇をふさいだ。少年王と三十路の女奴隷の舌と唾液が交じり合う。そして「うぅ、ぐぅ！！」王は息を止めてうめいた。綾子は自分の子宮の奥に王の、熱い、指でつまめるような、濃い精液が注ぎこまれていくのが分かった。
自分の上で息を弾ませている少年が自分から離れていく。さすがに疲れているようだ。
「あぁぁ・・・」綾子は涙を流した。クリトリスとラビアを失い極端に感度の鈍くなった性器。
そこに描かれた紫の牡丹の花が刺青された股間から愛液と精液が流れ出ている。今回も綾子はイくことが出来なかった。完全に蛇の生殺しである。情欲の業火は燃え上がったままの快楽地獄である。

少年王は、ベッドの右に横たわり綾子に右手を回して肩を抱いた。左手で綾子の顎をつまみ此方に向ける「うん？ずいぶんな顔じゃな！何か拭く物を！」それまで綾子の痴態を見守っていた綾子の娘の一人、琴音がおしぼりを持ってきてくれた。王はそれを受け取り綾子の顔を優しく拭いてあげた。おしぼりを娘達に渡すと、肩を抱いていた右手で綾子の小ぶりの西瓜ほどもある右の乳房をまさぐりだした。ブチュぅ！王は綾子に口付けした。レロレロブチュブチュお互いの唇を貪り合い舌と舌が絡み合う。「あぁぁ！紫牡丹よ！僕の可愛い奴隷！愛しているよ！
初めてそなたを見たその時から！！！だからこそ！そなたを手に入

れるためにここまでしたのだ！そなたの心は今も尚、あそこにいる３人の娘達の父である事は解っておるし、日本人のそなたは無理矢理に割礼を受けさせられ、その様な・・・、女として不完全な身体にされた事を恨んでおると思う。」

王は悲しそうにそう言うと綾子は慌てた様に少年王の胸に頬を寄せた。少年のまだ薄い肉付きと成熟には程遠い体。綾子は今までよがらされていた相手が、まだ自分の娘とたいして年が違わない事を思い返した。

「陛下、そのような事は申されますな。わたくしは！紫牡丹は！奴隷としてではなく、一人の女として心から国王陛下を愛しております。ですから一日でも早く王様との子どもを授かろうと頑張っています」

王は綾子を抱きよせ「紫牡丹よ！」しっかり抱きしめた。そして綾子は王の手をもち惨たらしい儀式の末にクリトリスもラビアも無くなった・・・。その代わりに紫の牡丹の刺青がされた己の股間に導いた。

綾子は媚びる様な笑顔で「陛下、この身体に邪な欲望を作り出す肉の塊を、わたくしはここで３０年以上もの間、育ててきたのです！その間常に色欲にとらわれ快楽を貪ってきたその罪は計り知れません！わたしはその罰を受けたのです。あの恐ろしい悪魔の化身を自らの手で取り除かせていただいた時の全身をつきぬけるような激しい痛みがあったからこそ、過去の罪深い自分と決別し陛下の奴隷である紫牡丹になる事ができたのです、ですから心から感謝しています。」綾子は続ける。「おそれおおくも陛下がわたくし達を後宮の奴隷として迎えてくださり割礼をさせるようご指示を出された時にわたくしは泣いて許しをこいました。今思えば愚かな事でした。悪魔の芽を取り除きその上ココにこの様な素晴らしい彫り物までし

ていただきました」
いい意味で脂肪で緩んだ下腹の先に見事な紫牡丹の刺青。「そ、それに・・・」先ほどまでの淫乱な娼婦の様であった綾子は年甲斐もなく頬を朱に染め潤んだ目を逸らし「三つ子の娘のいる母である女を・・・生娘に戻していただいたのですもの・・・。」ベッドのシーツに「の」字を書いている。綾子は少年王の筆おろしの儀式の前に処女膜の再生手術を受けていた。

娘達やメイド達も見守るなか処女膜の再構築をされたのだ。「終わりました」医師のの告げる言葉を聞いた時何も考えられなかった。それでも後宮の一室で心配そうにしていた娘達に「へ～き！へ～き！大丈夫よこんな事くらい！」と笑いながら答えた。
「処女よっ！処女っ！この年でまた再び処女に戻れるとはおかあさん夢にも思っていなかったわ！」

再び後宮の寝室
「嬉しくて、思わずはしゃいでしまいましたわ！」
右手に頬をあて「生娘に戻ると何か世界が違って見えましたわ！」
「まてまて！紫牡丹そんなにしゃべるな」王は苦笑いしながら止めた。綾子は微笑がえす「陛下、女は口から生まれた生き物ですわよ？それは王女であろうと奴隷女でもおなじ。お口を満たさないと生きて生けない生物ですわ！おいしい食べ物やお菓子、なにかで満たしていただけないと言葉で満たしますわ！」「それならば世の分身を詰め込むが良い」「かしこまりました陛下」満面の笑みでひれ伏し四つんばいで彼のイチモツをくわえた。
その後、綾子は口の中にはき出された王の精液を一瞬その味と臭いにまゆをひそめたがしばし味わいゴクリと飲み干した。のどにから

みついた様な嫌な感覚があるが「おいしゅうございます、陛下、子種を下の口だけではなく上の口にも注いでいただける紫牡丹は幸です。」心から幸せそうに微笑みながら感謝を述べた。

綾子は３人の娘をともないは湯殿に行き王の身体を洗い清めた。最後に部屋を後にする王の後ろでひれ伏して見送った。

閑話休題

昨夜の子作りの疲れの癒えぬ綾子は気だるそうにベッドからノソノソと起き上がる。巨大なベッドにはまだ３人の娘達が裸で寝ている。自分も娘達同様に全身は一糸纏わぬ全裸である。けして肥満体ではないがムッチリとした脂肪と強靭でしなやかな筋肉のあるバランスのとれた体つきの３０代中ごろの美しいご婦人である。

「綾子さまこんなものが見つかりましたよ～」
扉を開けると元気そうな１５・６歳くらいの褐色の肌をした漆黒の長い髪をポニーテールにした中東系の少女がいた
髪を白い布でおおい白い質素なエプロンをグラマラスな体に着けている、他は何も身に着けていない、やや顔や布がすすぼけている。
「どうしたのです騒々しいですよ！ラーディアさん！」
「倉庫の大掃除を手伝わされていたら、こんな物が出てきました。１５０年以上も昔の日記です」
「それは変わったものですねぇ？」綾子は好奇心に駆られた。
ラーディアは綾子にそれを手渡した「ねぇ綾子様皆でコーヒーを飲みながら読んでみましょうよ！！！」
「そうですねぇ～？では早く現場に戻ってお掃除を終わりにしましょう」

「えっ？？？」
「貴方お掃除中にこれを見つけた勢いでサボろうとして此処まできたのでしょう？今戻ればお仕置きもたいしたものではなくてすみますわよ？それまで私はもう一眠りしますわ」
そういうと綾子はラーディアの手をつかみ倉庫の方に連行していった。

＊次の場面綾子たちの為の絨毯のひかれた広間
「ずいぶん古いものですね？」１８・９歳の少女、恵美である。めがねをかけている。というよりメガネ以外のいかなる物も身に着けていないのだ。
彼女はこのハーレムに女奴隷ほぼ全員になされている『割礼』つまり『陰核及び小陰唇の切除』の際にただ一人、黙って脚を広げ、うめき声一つ流さずに耐え抜いてその勇気と我慢づよさ賞賛された娘だ。他の女達は、無理やり押さえ付けられて泣き叫び、涙と鼻水と涎で顔をくしゃくしゃにして、断末魔の叫び声を張り上げていたのにである。

綾子は思い出す、満月の月明かりと篝火の照らされ大勢の見物人が見守る中、真っ青な顔で脚を引きずるようにして会場に入り絨毯の上で
白いワンピースの様な服を脱ぎ捨て、生まれたままの一糸纏わぬ全裸姿なる。クッションにその重いお尻を沈めた両脚をM字に開きこれまで亡夫以外に見せた事の無い性器を丸出しにして全身がガタガタと震えていた。自分で手と股間に強力な消毒液をかけた。そして口に白いタオルを頬張った。己自身のクリトリスを左手の親指と人差し指でつまんだ。
糸の付いた針を右手で持つ。陰核を引っ張りあげる。針を陰核に刺す。「ぐぅおー！」

悲鳴にならない悲鳴がタオルを限界まで突っ込んだ口の奥から響いた。針で糸を通した。下に引いた白いワンピースが紅い血で濡れる。左手に持ち替えて糸を引っ張りあげていく。クリトリスがぐっと突き出る。全身にだらだらと汗が出る。砲弾のような巨乳が震えている。綾子は右手にメスを持つ。それを陰核に持って行く。じっと股間を見つめる綾子

引っ張りあげてすさまじい雄叫びを張り上げながら自らの手で陰核をかっ切った！！！

その時はまるで幽鬼のようであつた。それを思うと彼女の我慢強さは凄い。

そんな恵美の肩にしなだれかかって恵美の大きすぎない乳房を持て遊んでいるのが１７・１８歳位のポニーテールのさやかという少女、東洋人とは想えないくらいの抜群のスタイルを惜しげもなく晒している、ただし綾子の様なイヤらしい体つきではない。後宮の美女達はみな薄着でそのまま水浴びができるいでたちだし、裸で生活している者も珍しくないがそこは女、装身具や薄布等を着けおしゃれを楽しんでいる者もいた。だが彼女は何一つ身に着けず生まれたままの姿を晒している。ラーディアや綾子の３人の娘と一緒に後宮内を大声で騒ぎながら走り回っている。

そして「わたくしとラーディアさんがお掃除をしていて見つけましたわ」金髪碧眼のペルシャ系の美少女ルーンだ。大きいクッションにすわり胡坐をかいている。綾子達は勿論ラーディアより前に割礼を済ませた股間は丸出しで蝶の刺青がされている。隠そうという意思も感じられない本人曰く「わたくしは元、売れっ子娼婦であすわよ？あんなに大勢の方々に見られてしまっては、もう隠す意味がありませんわ」慣れとは怖いものである。ギリシャ彫刻の女神のようなグラマラスな肢体をかくす事はない。その隣に先ほど騒ぎをおこ

したラーディアの褐色のグラマラスなボディがあった。金髪碧眼で白い肌のルーン漆黒の髪に黒い瞳そして褐色の肌をした中東系の美少女ラーディアこの対比は見事であった。
『ルーン様が１９世紀中ごろの物言ったんだよ！ねぇねぇ読でみようよ！』

「まぁなんてことを？他人の日記を読むなんてお行儀がわるいですわよ！まったく、辞書と文法書くらいあるわよね？」なんて態度だが綾子も何となく興味が出てきた。
「それではどんな事が書いてあるか訳していきましょう」と恵美が言った。

始まり（後書き）

今後修正される可能性大

日記の中身

ルーンいわく日記を書いたのはどうやら当時の女奴隷の一人のようだ。

日記の内容はとるに足らない話が大半を占めたが一つ興味を引く内容があった。

ラーディアは、このハーレムの女達の定番の裸である。それも一糸纏わぬ生まれたままの姿だ。勿論、パンツなど穿いていない。割礼でクリトリスとラビアを切り取られ深紅の薔薇の刺青をさされたおまんこも丸出しである。

そのラーディアにしな垂れかかられながら日記を読んでいたんは、アクセサリーを少し着けただけのルーン。事実上の全裸である。それでも〝文明〟を感じさせる。

が「あらこの様な話が」というと綾子たちに顔を向ける、腕が少し動き押しつけられていたラーディアの褐色の大きな乳房が蠢く「やぁん！ルーン様オッパイこすれちゃうよ～」「ハイハイ仕方ありませんねぇ」というと自分の唇をラーディアに押しつけしばし舌を絡み合わせた。この二人は、以前からレズビアン関係位ある。何時も二人で身体をまさぐりあったりしている。

「綾子様、皆様、この日記の著者が仲良くなった、ある美しい異国の姉弟のお話です。姉はミカエラ、弟はアレンと言ようです。イ〇

ド生まれのどうやら英国東イ○ド会社の関係者の子供のようだが、詳しい事は解らないようです。それはイ○ドで大規模な反乱があった後。この砂漠のオアシスにある後宮につれてきたようです。当時の王様が見聞を広める為に世界を巡っていて現地の混乱につけこんで手に入れたようだとのことです。王様はこの哀れな姉弟を息子である王太子に奴隷として送られたのだ。

二人についてのお世辞にもうまいとは言えない詩が書いてある。姉は『その乙女の髪は月光に照らされてエメラルドのように輝く髪をしている』。は弟は『髪は黄金に輝く、これほどの金は天上の宝物庫にもないであろう、姉も弟も肌の美しさのあまり白薔薇たちは枯れてしまいそうだ。』

日記の中身は初めて後宮であったその時から書かれている。

「《私》奴隷としての名前は白百合、はある昼下がり王太子様の母に呼び出された。《私》はすぐに王太子母の部屋に向かった」
部屋に通された《私》は作法により床に座りひれ伏して頭を下げる
「お呼びでございましょうか王太子母様」
「面を上げなさい、白百合」私の目の前に王太子母様がおられる。≪私≫同様裸だ。だが豪華なキラキラと美しい装身具の数数。サンゴの髪飾り。宝石をあしらった銀のサークレット・チョーカーにブレスレットにアンクレット。宝石の指輪。
私はため息がもれた。この様に身を飾ることができる彼女に嫉妬と妬みを覚える。

それに引き換え私は・・・・。昔ここに誘拐されてきて衣服をとりあげられてからずっと生まれたままの姿で過ごしている。王様から贈り物をもらってもいないので装身具も持っていない。いつも一人ぼっちの≪私≫それに引き換え目の前の女は・・・幸せに。私と同

じ村で生まれてすごし同じ日に誘拐されて後宮に入り同じ日に割礼されてほぼ同じ時期に初潮がきた。ずっと友達でいようねって約束したのに。それなのに彼女は少し後に夜伽を命じられて・・・。あの女の侍女として夜伽の場に立ち会わされた。寝台の上で胡坐をかく青年王に「おいで三日月」といわれ幼い身体をブルブル震えながらイチモツ見つめる。「こ、これがおちんちん初めて見た」思わず私と彼女の言葉がハモる。「そうだよ！そなたは次代の王の母になるやもしれぬのだ」「はい！王様喜んで！」意を決したように答える。彼女は恐る恐る腰を下ろしていくそして「自分で入れるんだよ！三日月」王のイチモツを恐る恐る三日月の入れ墨された股間に導く。そしてブチという音がしたような「ひぎゃ～！」

そうこの女はたった一回だけ。処女を喪失したその晩に生娘から即母になったのだ。

生まれたのは男の子。彼女は王太子の母という立場まで手に入れたのだ。それに引き換え≪私≫はまだ真っサラの処女のまま・・・。これだけ大勢の女たちがいて呼ばれるのはお気に入りの少数の女たちだけ。夜伽に呼ばれぬ女たちは長い間男を見ることなく過ごすので性欲を持て余す。この後宮の宦官たちは、昔はタマタマだけ取っておちんちんは残していたらしいがあることがありオチンチンまでしっかり切り落とされている。

しかも恐ろしいのは美少年たちも囲われているのだ。少年たちとも争わないといけない。私の穴は男の尻以下かな・・・？

だから女同士で愛し合う事も珍しくない。私たちもそうだ。愛してる、ずっと一緒といったのに私だけを見ていて欲しかったのに。王様に奪われてしまった。今は豪華な装身具をまとう王太子母と一糸まとわぬ姿でいざまずく女奴隷・・・・。

「どうしたのです白百合？そのような険しい顔をして？わたしの前で緊張するようなことはないでしょう？幼いころから一緒、にここに来てもずっと一緒でしかも私たち友達でしょう？」と言ってはにかむ吸い込まれそうな表情だ。王様が彼女を可愛がるのはよくわかる。「ところで王太子母様御用とはなんでしょうか？」はっとした表情を浮かべる「あっ、そうだったわ！今度国王陛下が王太子に贈り物として新しい奴隷をくださる事になったのよ！それでその子達のこと面倒見てほしいのよ？」「達？複数ですか？」

子持ちには見ない若い娘のようにはしゃいでいる。王太子母は嬉しそうに騒いでまくしたてる「そう2人よ！女の子と男の子、しかも欧州の白人よ！白人！しかもかなり裕福な家庭の姉と弟よ！欧州の白人奴隷なんてかつてのオ〇マン帝国の後宮みたいだわ！あのいまいましい白人の子供を奴隷にするなんて国王陛下はすごいわ！」「はぁ」≪私≫は適当にあいずちを打つ。その哀れな姉弟の面倒をみるのか？・・・。

つまり割礼や去勢の準備をしないとそう考えていると「ああ、そうそう割礼も去勢ももういいそうよ？すでにすませたから問題ないと陛下はおっしゃっていたわ」

話をしていると王太子がやってきた。年はまだ精通が来るか来ないかくらいだったはず。母に似てとても愛くるしい顔立ちをしている。もちろん男なので質素だがちゃんとした仕立てのいい衣服を身につけている。私は彼の母親に対するのと同じように正座をして三つ指をつく「母上お呼びですか？」

「よくぞ来られました王太子殿下！国王陛下より贈り物がとどきましたわ。」

「贈り物？なんでしょうか？母上？？？」無邪気によろこぶ王太子

殿下。

『新しい奴隷ですよ』

王太子殿下の顔に無邪気な満面の笑顔をが浮かぶ

^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^

^^^^^^^^^^

とある兄弟の悲劇

ハーレムの談話室、外はきわめて強い日差しだがこの宮殿は窓がほとんどなく昼間でも薄暗い。湿度が低いので日差しを遮れば意外と涼しい。絨毯の上にクッションを敷いて思い思いに座っているのは、全裸又は全裸同然の女奴隷達。彼女達は集まり百数十年前の日記を調べていた。
腰まである長い金髪をロングストレートにした碧眼のペルシャ系の美少女ルーン。スタイルは細身だが胸も尻もバランスよく大きい。無毛の股間にはクリトリスも小陰唇も切除され、その代わりに蝶々の入れ墨が彫られていた。左手を後ろから回し隣にいるラーディアの左乳房をまさぐっている。

ラーディアは髪はルーンとおそろいにしているが色が黒い肌も健康的な褐色だ体つきは年上のルーンよりも背が高く肉付きもいい。巨乳・巨尻に分類できるかもしれない。そしてルーンよりも露出度が高いのだ。
完全に何一つ身に着けていない、生まれたままのスッポンポンだ。
ルーンとて、僅かな装身具をつけているに過ぎないのだが・・・。
彼女の深紅の薔薇が彫り込まれた股間以前は少年並みの巨大な陰核を持っていてルーンをイカせまくっていたが割礼されて以来立場は逆転今ではすっかりルーンの可愛い子猫ちゃんだ。こんどは、ラーディアが、愛するルーンにしな垂れかかり彼女の乳房をもてあそんでいる。
ルーンは記録を読む。
その姉弟がここまで連れてこられた事件の話を・・・・。

イ〇ドの某所にある村、そこの集会場、夕方日がだんだん傾いてきた。五月ともなるとまだ暑い。

裕福な身なりをした白人の少年少女が大勢の人に囲まれていた。とても友好的な雰囲気ではない。
少女の名前はミカエラ、年は１６歳位少年の名前はアレン年は１４歳、二人は異母姉弟であるが、とも父方の叔父東インド会社の関係者である父方叔父に引き取られた子供である。
ミカエラは光の加減で青にも緑にも見えるとても長いプラチナブロンドの直毛の髪をツインテールにしている。アレンは黄金色の髪をしている、少年としては長い方だ。
服装は、ミカエラはこの蒸し暑い中でもヴィクトリア朝の踝まであるような長いスーカート顔以外ほとんど露出はない、帽子もかぶっている。小柄なアレンは子供サイズの紳士服だ。
顔立ちは異母姉弟とはいえかなり似ている。白い絹のような肌。顔立ちも体つきもアングロサクソン系のようなごつさはなく、ラテン系の血が色濃く出ているふうにみえる。

二人とも抱き合い涙を浮かべて脅えている。何でこんな事になっているかと言えば、理由は簡単である。
全国規模で大規模な反乱がおきたのだ。東インド会社による長年の圧政不満を呼んだ。
そこえもってきて、現地の兵士たちに支給された最新型銃の火薬弾

丸入れの袋。これを歯で噛み切って銃口から装填するのだが、その袋に染みこませた油が豚や牛のものだ、という噂が広まり、現地の宗教的な戒律に触れてしまうと反感を呼んだ。そこから反乱がおこり、その影響がここまで及んだのだ。

東インド会社の社員達もろとも養父母達も既に殺されてしまった。現地でできた友達に姉弟は匿われていたが、直ぐに見つかってしまい、引き立てられてここに連れてこられたのだ。

『ミカエラとアレンを殺さないでーーーー！』「アレン！アレン！二人とも悪くないんだー！」遠くから二人を匿ってくれていた友人達の叫び声がする。

「さぁ、どうやって殺してやろうか」殺気に満ちた人々。

ミカエラとアレンは美しく可愛らしい顔を恐怖に歪ませ抱き合って震えている。

「おねぇちゃん・・・」「アレンくん・・・」

今日の昼頃。中近東の方から来た裕福な商人旅行者の一団が村からさりお茶を飲んでいたらこの騒ぎだ。二人はあまりの事態の落差にただただ混乱し恐怖している。

昨日の今頃は商人の団長・・・鞭のようにしなる一見細見だが屈強な体つきをしていてアゴ髭を見事にそろえたダンディな中年の色男・・・砂漠の民らしい大きな声で「本当にお美しい・・・。二人とも私の息子の嫁にしたいですよ！はははは！」

「いや、あの僕、男の子ですから・・・」アレンは苦笑いしていた。

「いやこんなかわいいこが女の子のはずないじゃないですか」
それがこんな事に・・・！

そして、村人たちが出した結論はアレンは性器を切断・去勢される。
ミカエラは陰核と小陰唇の切除、そして性器に焼けた鉄の棒を突き
入れられる。
事実上の死刑だ

早速、準備に取り掛かった。

村の中央の広場で憎い侵略者の子供を血祭りにあげるのだ。
刃物のような薄い鉄の片鱗が松明の中にくべられている。

アレンとミカエラの姉弟は服を引き裂かれ一糸纏わぬ全裸にされて
いた。足元には先程まで彼らの身を美しく彩っていた衣装の無残な
残骸があった。

二人とも後ろ手に縛られていた。
刑の執行はまずアレンから

アレンもミカエラも全裸にされ自分たちが何をされるかを知らされ
ていない。

アレンは全裸で、腕を後ろに回されて、手首をロープで縛られて、
数人の男達に押さえ付けられている。
勿論、アレンは自ら望んで裸になったのではない。無理やり服をは
ぎ取られて晒し者にされているのだ。

アレンの顔立ちは可愛らしく、背も小さく、とても男の子には見えない。可愛らしいドレスを着せれば十分に女の子で通じる。手足も細く華奢でさえある、胸板も薄い、とても少年とは思えない。だが全裸にされて、隠す物の無くなった股間には、確かには男性器が、しっかりと、ぶら下がっていた。恐怖のあまり、ちぢこまり、只でさえ小ぶりの陰茎は、さらに小さくなっていた。陰毛はまだ一本も生えていない。先端までキッチリ皮に包まれている。
「た、たすけて、、、」すがるような声とまなざしで訴えかける。
声変わり前のボーイソプラノ。
村人達はざわつく『『こいつ、男だったのか？？？？？』』村人の少なからずアレンを男装している少女思っていたのだ。
『『白人にもパドマみたいのがいるなんて』』
パドマ・・・アレンのこの村でできた友達。彼より一つ下らしい少年。そしてアレンに勝るとも劣らない女性的容貌の少年であり姉弟を匿っていた人物でもある。
野次馬たちの外で拘束されている可愛らしい《男の娘》・・・・もとい男の子。

「うわぁ、許して、許してぇ。」アレンの可愛らしい唇からは助けを求める声がもれていた。
村の男達は、アレンを羽交い絞めにした。代表者らしい老人が言う
「お前たち姉弟には罰を受けてもらう。お前さん達にしてみれば、理由のない事だ。私自身は、正直、こんな八つ当たり、としか言えない事など、したくない。だが、こうでも、しないと、収まらないもの達がいるのだ。」周りの村人達を見回して不快げに老人は言った
「罰？」アレンは弱弱しく尋ねる。誰も何も答えずにアレンは男達にがっしりつかまれる。脚も動かせなくされた。
そして。恐怖で縮み上がった、皮に包まれた、可愛らしい、おちん

ちん。
それの皮を引っ張り上げられる。ギンギンに伸びた包皮、それを小刀で切った。
パチン！という音がした。その次の瞬間！アレンの愛らしい唇から「あぁぁっっっーーーー！！！」甲高い悲鳴がした。

アレン陰茎を覆っていた包皮は取り除かれた、露出したアレンの亀頭は血まみれだった。

「うえぁぁあん！アッグ、あぐぅ、いだい、痛い痛いよぉ！うぁーーーー！」アレンは泣き出してしまった。顔をくしゃくしゃにして、声を張り上げて。

アレンは思った。これは罰なんだ、自分押してきたことに対して。陰茎の先からくる激しい痛みがアレンに思い出させる。

自分の罪・・・・。姉のミカエラはよく近くの川縁で水浴びをしていた。何時もアレンはそれを隠れて覗いていた。アレンは少し離れた場所で服を脱ぎ全裸になると静かに泳いで水草が茂っている所に身を潜め、異母姉の水浴びを鑑賞していた。光の加減で青にも緑えるプラチナブロンド。女らしいとは言えないスレンダーボディ。南国の日差しでは融けてしまうのではないかという雪のような肌。。何もかも美しかった。そう思いながら自分の陰茎をしごきたてていた。思春期の少年らしい指でつまめるほど濃い精液を周りの水草にぶちまけるとそそくさと逃げ出した。
そして部屋で1人泣いた。冷えた身体を川岸で温める為に大の字で横になる異母姉の性器・・・目に焼き付いて離れない。母が違うとはいえ姉弟ゆえに決して許されない。いずれどこかの男に奪われてしまう事がわかっている。（でも）アレンは今夜姉に己の思いをぶつけようと心に決めていた。だからこれは天罰なんだ。アレンは思

った。
ミカエラは全裸で引き立てられてきた。白い肌羞恥で染まっている。
「アレン・・・くん」ペニスの先から鮮血をしたたせる異母弟に心配そうに目を向ける。
ミカエラ突とばされて、尻もちをつく、白い剥き出しの尻が地面と衝突した。
「足を広げろ！皆にお前の恥ずかしい所を見てもらえ」
ミカエラは意味がわからなかった。そして「い、いやいや！できない、できない、許してぇぇぇ」涙を流して哀願する、全身が震えている。そうすると男達が、ミカエラのスラリと長く美しい左右の脚に2人ずつ持った。左右に広げようと引っ張られる。ミカエラは死にもの狂いで脚を閉ざす。しかし男の力には敵わず両脚が割られていくV時に広げられる。白人の美少女の性器が大勢の人々の目にはいる。
「くぁwせdrftgひゅじこlp;@:「」恐惶状態になり、わけのわからないことを叫ぶ。
村人達から喝采がおこる。

そして、ミカエラの性器・・・、陰毛は綺麗に処理されてた、そしてやや上向きの大陰唇。
一人の女が近寄る。手には裁縫用の糸切はさみのような感じの物を持っている。「悪魔め！目にもの見せてやる」そう言うと片手でミカエラの陰核を力任せにつまみ上げる。
「ひぎぃ！」敏感な所への攻撃悲鳴を上げる。ミカエラは自分もア

レン同様に陰核を包む皮を着られるの思った。顔から血の気が引いていく「いやぁぁーー！やめてぇーお願い何でも言うことを聞くからぁ！ぐがぁーーー」村中に轟く悲鳴
彼女の予感は外れた。悪い方に。
切られたのは皮ではなく神経のかたまりである陰核だった。ハサミが交差する。交差するごとに、少しずつ陰核に切れ目が入っていく。「きゃぁーーー！」其のたびにミカエラの口から断末魔の悲鳴が鳴り響く。目はカッと見開かれてる。全身から冷や汗が噴き出す

「やめてぇ！ミカエラに酷いことしないで」サリーに身を包んだ少女・・・マラティ。パドマとともに姉弟を匿ったミカエラの親友は縄をうたれ何もできず泣いていた。「私がもっとしっかりしていればこんな事にはならなかったのに」

それから少ししてミカエラの性器から陰核を完全に切離す最後の一撃が加えられた、プチン！「あぐぅあぁー！」目をカっと見開いて呻いた。
女の手に小さな肉塊がある。少し前までミカエラの股間にあったクリトリスだ。今切り離されたのだ。この美しい白人の少女は陰核快感を完全に失ったのだ。そしてさらに小陰唇も切り裂かれていく。
あらかた作業が終わり陰核と左右の小陰唇が切除を終えたときミカエラは涙と鼻水と涎で顔をくしゃくしゃにしていた。

ミカエラは思った。これは天罰なんだ

ミカエラは異母弟が自分の水浴びの時、覗いていたのを知っていた。承知の上で身体を晒していた。
そして・・・。アレンが立ち去った後に、水草についた白濁液の匂いを嗅ぎながら、自慰にふけった。そしてアレンが友人のパドマと

一緒に、川で水遊びをしているのをアレン同様に覗いていた。自室に戻りアレンの可愛らしいおちんちんを思い出しながら自慰にふけった。

（あの可愛らしいアレン君のおちんちん、いずれ何処かの女に。。。）ミカエラは今夜弟に己の思いをぶつけようと心に決めていた。だからこれは天罰なんだ。ミカエラは思った。母親が違うけど実の弟を好きになったからなんだと。

ミカエラは、股間から血をダラダラ垂らし、四つん這いで泣きながら、声を絞り出すようにいう

「お仕置きは終わったんでしょ？私たちが悪い子だった、て認めるから、もう気は晴れたでしょう？解放してぇ！早くお手当しないと2人とも死んじゃう・・・」股間から焼けるような激しい痛みに襲われながら。

村の外れの方で何か騒ぐ音が聞こえる。

「・・・？？？まぁいい。仕置きなどまだしておらんよ！これは余興のようなものだ。おお、来たか」

たき火の中から何か長細いものが抜き出された。それは焼けた刀のようにも見える。「やれ」

そういうと数人の男達が、ぐったりとしている、アレンの両脚をつかみ、又裂きかというほど広げた。「い、いやぁ。な、何をするぅ、気なの？止めてぇ、、、許してぇぇ、、、こ、怖いよぉ～。おねぇちゃん・・・うぁっ！。」

まだ血の止まらないアレンの性器を鷲つかみにした、次の瞬間、焼

けた刀らしきものが振り下ろされた・・・・。バァッシュウゥゥ・・
・・。　何かが焼き切られる音

アレンもミカエラも何かが、ボトリ！と何かが地面に落ちるのがわかった。

ミカエラは、何だろうとそれを見た・・・・・・・・・・・・・
・・・・？

それは、・・・・、アレンの陰茎と陰嚢だった。アレンの性器が焼き切られたのだ。既にアレンは、男達に押さえ付けられ、大股を広げ、白目を剥いて気を失っていた。

「アレンくんの大事なものが・・・いやぁぁぁーーー」ミカエラが錯乱して様に騒ぎだす。

アレンは男性器を焼き切られたのだ。

「娘！次はお前の番だ。その穴にこの焼けた棒を突っ込んでやる」

ミカエラを押さえ付け

四つん這いにされ尻を高く上げられた状態で後ろからまだ何物も受け入れたことがない膣に焼けた鉄の棒を突っ込もうとする。

ミカエラは顔を恐怖にひきつらせて叫ぶ「いやぁーーー」血がまだ止まらない性器に焼けた鉄の棒がせまる。シュウゥゥゥ・・・・。

罵声と怒号が近づいてくる。そして

「どりゃぁーー～～～！！！」一刀のもとにミカエラに狼藉を働こうとする男が切り捨てられた。ミカエラは虚ろなめでそれを見た。

「貴方は・・・」今日のこの村から立ち去ったはずの中近東からの

旅の商人の一団とその隊長さんだ。この状況下でも平然としている。
ミカエラに笑顔を向けながら言う。
「いや～貴女方、姉弟をわが愛する息子の，物，にするのをあきらめきれなくてね！貴女方の養父母から力ずくでも奪い取る為に舞い戻ってきたのですよ！
それと嫌な情報を聞きつけて、まさかとは思ったが慌てて、駆けつけて来てみたが・・・神よ、この馬鹿どもを呪われよ！抵抗できない、しかも女子供を惨たらしく殺そうとは・・・・。」
色男の隊長さんは全裸で股間から煙を吹いているアレン見て目をむき、股間から血をしたたらせているミカエラを見て顔面蒼白になる。

「力ずくでもって・・・・？」ミカエラは驚く、確かに姉弟の亡き父は養父の実の兄だった。子供のいない養父母に引き取られたが養母からは蛇蝎のごとく嫌われていた。

「皆の者！とりあえず2人を連れて脱出するぞ！獲物を馬車まで運ぶのだ！！」大声で部下に指示を出す。
「はっ、陛下、心得ました」「そちらで呼ぶんじゃない！」
商人の一団は村人達を打ちのめしていく。

そして彼らは、姉弟を担いで隊商の馬車まで来る。すると二人の少年少女がいた。隊長は驚いたよう顔をして「君たちは、パドマとマラティじゃないか？どうしたんだ？」。
「お願いです、私たちも連れて行ってください」とマラティ「ぼく達二人を匿ったのでもうこの村にいられません」とパドマ
隊長さんは天を仰ぐと「友情を貫くもの達に祝福あれ。さぁ！逃げるぞ」

★

それから、馬車の中で二人は治療を受けた。隊商の中に医師がいたのだ。

それによるとミカエラは陰核・小陰唇を失ったのと入り口付近に軽い火傷はあるが、

膣自体は無傷との事。

街道を行く隊商の馬車の一団、馬達の足音や馬車の車輪がガラゴロと鳴り響く、その中の一台の馬車の中にミカエラはいた。

上半身に白いシャツを一枚だけを身につけている。下半身は包帯を巻かれて、まるで相撲取りの'まわし'の様だ。股間の所に少し赤い染みができている。

寝かされたミカエラは、泣いていた。時々うめく様に「痛い、痛い、、痛い、、、痛いよぉ、、、、、。」と声を上げる。

割礼された性器が焼け付くように痛む。長い蒼みがかったプラチナブロンドをツインテールにした可愛らしい顔を苦痛に歪めている。

痛いのは身体だけではない（大事なところを・・・、クリトリスを斬られちゃたよぉ・・・・。もう、オナニーが出来ないなんて・・・・。オナニーが出来ないなんてぇ・・・。わたし耐えられないよぉ・・・。）ミカエラはオナニー中毒と言える状態だった。時間さえあれば異母弟のアレンを思いオナニーにふけっていた。それが訳もわからずいきなりクリトリスも小陰唇も切除されてしまったのだ。何より大勢の男達の前で、全裸にされ、大股をおっぴろげさせられ、'乙女の秘所'を晒し者にされた精神的なダメージは年頃の乙女には辛かった。「ぐす、えっぐ、えっぐ、うぇぇーん」ミカエラは声を上げて泣いた。養母からは疎まれてはいたがそれでも亡き父の弟である養父は、自分達姉弟に、かなり同情してくれていた。だが、あの瞬く間に何もかも失ってしまったのだ。今の自分とアレンは、あの

やり手そうな隊長さんの息子さん（・・・1 2~3歳くらいの可愛らしい男の子だそうだ・・・）の【お土産の奴隷】として遠い異国の地へ連れていかれるのだ。「いい人だと思てたのにぃ・・・。奴隷なんて・・奴隷なんて・・嫌ぁだよぉ・・」
自分達は逃げる事も出来ないのはわかっている。

アレンの男としての人生は、終わった。現代医学ではどうする事も出来ないと言うことだ。できることはアレンの惨たらしく焼き切られた部分の洗浄と消毒そして尿道が癒着しないように処置をする事だけであった。

「ぼ、ぼく・・・。も、もう、男の子じゃないなんてぇ・・・。」
虚ろな目でアレンは呟いた。
彼は、ミカエラ同様に馬車に揺られながら横になっていた。

男性器を失った傷口が激しく痛む。アレンは茫然自失だ。小さい頃から今まででも、女の子と間違えられる事などよくあるが、ある意味、本当に、女の子，にされてしまうとは・・・・。（・・・もう、立ってオシッコも出来ない・・・。）陰茎を失いこれからは座ってようを足すことになる事を考えた。（もうオナニーも出来ない・・・。何より、もう決してお姉ちゃんと，する，事が出来ないんなんて）恋い焦がれた異母姉との性行が無理な体にされたのだ。「神様、これは姉を好きになったぼくへの罰ですか？」

馬車の中で隊長は周囲のもの達に言った「この帝国は終わりだな、全国規模で反乱がおきているようだが頭になるのがいない。会社の軍隊が本気になれば瞬く間に鎮圧されることになる！やむを得ないな、一度本国に帰り、イギ〇ス本国の動向を含めて対策を練りなおさないといけない」

そしてミカエラとアレンは、異郷の地へと連れ去られてしまいました。ハーレムへ、そこは後の世に綾子達が囚われの身になる所だった。

それから，
野を超え、山を越え、海を越えてかの地へと到着しました。
そこでミカエラとアレンをを待ち受けていたのは、奴隷になる為のおぞましい試練であった。

陰門の封鎖。
大きな屋敷というより宮殿と言ってよいレベルの建物でミカエラは性器の封鎖手術を受けた。

清潔な部屋に入浴を済ませたミカエラは連れてこられた乾燥しているので長い髪もスグに乾いてしまう。蒼みがかったプラチナブロンドをお気に入りのツインテールに決めている。着ている服は、長袖でで、スカートの裾が床まである青く長いワンピースだ。しかし腕にはしっかりと手錠がかけられている。これは隊長さん・・・実はこの国の王様だった、の息子つまり王子様へのプレゼントの奴隷だからだ。

その眼差しは虚ろで心ここに在らずという感じだ。数十分前に彼女は全裸にされたうえに数人の男達に屈辱的な《処女膜の有無の検査》をされたばかりなのだ。押さえ付けられ両脚を開脚させられ、大陰唇をこじ開けられ、代わる代わる膣の奥底を覗き見られる、という女として最高の屈辱を味あわされたのだ。彼女は羞恥のあまり、雪のような白い素肌が全身朱に染まり顔はまるで茹蛸の様になり涙をダラダラとたらしていた。数名の男たちの確認がとられた後、彼女が間違いなく処女だという書類が作成された。それがミカエラの新たな悲劇の始まりだった。

『間違いなく処女であることが確認された西欧人の可憐な美少女の奴隷』これがどれほどの価値があるか下手をすると同じ重さの黄金にも匹敵するかもしれない。西欧列強に押し込められている。決して手に入れられるはずのないものだからだ。

そして「処女の奴隷」である証として、鎖陰 ,が行われていることが重要である。つまり性行できないように膣の入り口付近を縫い合わせるのだ。今回はかなり変則的ではあるが、ミカエラは封鎖処置を施されるのだ。この国の娘達は原則として、クリトリスとラビアを切り、結婚まで性行出来ないよう性器の封鎖をおこなうのだ。

手術前に風呂場で特に性器を入念いりに洗われたうえ、割礼以、来手入れをしていなかった陰毛は、綺麗に剃刀で処理された。それをしたのは、先輩の王妃に使える女奴隷達である。

医師は言う

「ミカエラ！覚悟はできているね？これからお前の純潔を護るために、大事な所を封印する。その封印は王太子殿下に純潔を捧げる前に殿下御自身の手で解いていただく事になる。」

医師と助手達はミカエラの返答は聞かず処置に入る。助手達はミカ

エラを大きいクッションに押さえ付ける。ミカエラは抵抗するが小娘の力ではどうする事も出来ない。寝かされ長い脚を広げられ、スカート
をめくりあげられる。白い素足、ふくらはぎ、太ももそして下着を着けさせてもらえなかったので剥き出しの性器が見えた。「おぉ！ここから次代の王がお生まれになる、のかもしれないのだなぁ～」
「!?!」ミカエラは改めて恐怖した(見ず知らずの男の子の子供を産まさせられるなんて・・・)「きゃっ!!!」ミカエラ悲鳴を上げた。彼女の性器に針が貫通したのである。チクッ！また一針ミカエラの身体がビクンと跳ねる。一針事に可愛らしい声で悲鳴を上げていく。医師は言う「痛いか？その一針ごとの痛みがお前に課せられた使命の重さだ！王太子殿下のご子息を産むという重大な使命だ。それが出来ればお前は次代の王の母として大きな力を手にすることができる。」処置を終えた。
「うぅぅう、」ミカエラは股間から血を滴らせ痛みにうめいていた。強靭な糸でシッカリと封鎖された陰核も小陰唇もない性器、それを隠そうともせずミカエラは目をカっと見開き涙をダラダラ垂らし歯をかみしめ放心したようである。

「その傷が癒えたらお前は弟と共にハーレムで女奴隷として王太子殿下にお仕えする事になる」

王宮の一画にあるハーレム。王太子母の元に連れてこられたミカエラとアレンはびっくり仰天した。まだ若そうだ2・・・6か7歳位か？小麦色の肌に黒い髪と瞳をしたエキゾチックな美女だ。だがこれは・・・。豪華な宝石や貴金属のアクセサリーを身につけていたしかし衣服は一切身につけてにいなかった。全裸に装身具を身につけただけの美女が羞恥心のかけらもなく優雅な微笑みを浮かべながら迎え入れてくれた。

もう一人同じくらいの女性がいた。王太子母に負けないくらいの見事なスタイル。だが彼女は、本当になにも身につけていない。装身具の類すらない、生まれたままのスッポンポンだ。
さらに彼女の肌はミカエラよりも白い髪も真っ白だ。そして目も赤っぽい茶。どうやらアルピノの様だ。長いよく手入れされた白髪を首の後ろで結んでいる、どうやら自分の髪を切りそれを紐替わりにしているようだ。かなりの美女だが気弱そうで何処か陰気な感じがする。

そして白い長そでのシャツに紺色の膝丈より少し長いズボン柔らかそうな靴を履いた女の子・・・否どうやら男の子だ。彼が王太子の様だ。聞かされていたが本当に可愛らしい少年だ。アレンより幾つか年下らしい。ミカエラは少し嬉しそうに「こ、この子がわたし達の・・・ご主人様？」思ったより優しげな少年だったので安心したのだ。
ホッとした表情を浮かべる。

初対面

王子さまは、小麦色の健康そうな肌をした顔を赤らめて「うわぁ〜〜うわ〜〜二人ともなんて綺麗で愛らしいんだ！！！！」興奮した声で叫んだ。只でさえパッチリとした大きい眼をさらに大きくしてミカエラとアレンの異母姉弟を見つめている。

「わたしはラセード、この国の王子だ。そなた達の名は？」優しく微笑みながら尋ねる。声も高く可愛らしい。

王子の愛らしさに、奴隷として首輪を着けられている屈辱を忘れて、目をハートにして見とれていたミカエラは、ハッと我に返り慌てて「は、はい私はミカエラ、ミカエラ・フィオーレこちらは弟のアレン、アレン・カバネルです。母親が違う姉弟です、私たち。」

アレンも自分の事を棚に上げて、まるで女の子のような、王子というより王女でも通る、ラセードに惚けた様に見とれていた。「か、可愛い・・・・。」ミカエラに肘でつつかれてこちらも我に帰り「あっ、ハイ、ぼ、ぼく、あ、あれアン、アレンです、王子さま」

ラセード王子はクスクス笑いながら「なんだ、アレン、そなたも緊張していたのか？実はわたしもなんだ」照れくさそうにはにかんだそうするとラセード王子は「苦しかったろう？もうこんなん物着けなくていいんだよ」そういうと二人の首輪を外してくれた。

ミカエラとアレンは感激して「あ、ありがとうございます」涙を流しながら王子の手をとり感謝の言葉を述べ続けた。

「身分は奴隷となっているから公的には、わたしの所有物となるけど、普段、わたし達３人の時は気にしなくっていいんだよ！とりあ

えず立ち話もなんだからお菓子やコーヒーを飲みながらお話しよう」

王子は異母兄弟を連れてハーレムにある自室に向った。

「本日はここまでですね」全裸のルーンが本にしおりを挟みそして閉じる。

閑話休題

ここは、砂漠のオアシスにある巨大な宮殿、その奥の奥にあるハーレム。そこは、女だけの世界。主以外の男は決して入れない秘密の場所。

そこの広間の一つ数人の女奴隷達が集まっていた。彼女達は皆、全裸又は全裸同然のいでたちだ。

「本日はここまでですね」全裸同然のペルシャ美人、ルーンが本にしおりを挟みそして閉じる。

天井のドーム近くにある窓を見ると日がすっかり沈みきって暗い外がわかる。

全裸同然のルーンが白い素肌の手首に巻いた装飾の付いた腕時計を見ると「綾子様、そろそろ御時間ですので準備に入りましょう」綾子はハッとした表情で「もうそんな時間なの？ではおかたずづけしましょう」と綾子は立ち上がろうとした。「綾子さま、かたづけは私たちに小お任せ下さい。お勤めに励まれてください」そう青葉が申し出る「あらそんな・・・」綾子は今まさに女盛りを迎え人生で最も性欲の高まる時である。

この砂漠の真ん中にあるオアシス都市にあるハーレムに閉じ込められた時から衣服をとりあげられ、綾子の日々の舞踊の鍛錬や家事作業で鍛えられている、適度に筋肉のある身体に、適度な皮下脂肪

の付いた身体。あと少し太ると「太っている」と言われそうな体つき。二重アゴにならない首回り、ツンと上を向いた小ぶりな西瓜ほどある乳房、太鼓腹にならない程度に脂肪がある腹、厚い皮下脂肪覆われた筋肉質な尻、むっちりとした太もも。

そして、女が一番隠さないといけない部分、つまり生殖器も丸出しだった。

綾子は思う（・・・・わたくしの大切な！本当に大切な・・・おまんこ！は、まだ亡夫との結婚前。本当の処女だった１０代の頃に、永久脱毛を受け、永遠の童女され、３０歳を過ぎて未亡人になりハーレムに囚われてしまった。そこで割礼でクリトリスとラビアを切除、紫牡丹の刺青をさされ、処女膜再生手術を受けて３人の娘の母なのに無理矢理、生娘に戻されてしまった・・・そして娘達の見守る中での二度目の処女喪失・・・でも今夜こそイケるかも・・・そう思うと・・・・）

じゅうぅぅう。クリトリスもラビアも失った性器から愛液が溢れる。

終日全裸で生活している。その為に困ることがある。綾子の股間は既に潤んでいたなどというものではない肉壷から液体があふれ出ていた。それを隠すことができない。綾子は顔を朱に染め股間を両手で隠した。まるで乙女の様に「み、皆さん！み、見ないでっぇ～！」涙目で叫んでしまった。それを見ていたルーンは「まだまだ未熟ですねぇ」

夜伽の為の準備部屋で風呂からあがりのまだ全裸の綾子は、何やら探しているルーンとラーディアをしり目に、ほっと胸をなでおろしていた。「まだ羞恥心が消えていなかった」全裸に剥かれてから衣

服などほとんど着ていなかったから、もう全裸での生活に慣れて羞恥心など消えてしまったかと思った。だが自然に、羞恥心から、毒々しい紫色の牡丹の華が、奴隷の証として、入れ墨された、股間を隠した。「まだ私は大丈夫だと」もしかしたら大勢の殿方の前でも平気で全裸になれるルーンやラーディアの様になってしまうかも・・・・等と考えていると。「綾子さま今夜はこれを」と差し出された、

そして、異郷の砂漠のハーレムに閉じ込められた性の奴隷である綾子。

紫牡丹という名を与えられた女奴隷として、まだ精通が来たばかりの少年王により子種を授かる為に使われる部屋についた時の綾子は、長い黒髪は、えりもとでまとめられている。

白い質素なブラウスに膝丈のタイトスカート、肌色の、素足にパンプス。顔には黒いフレームの地味なメガネ。つい先ほどまでは全裸である。この落差は大きい服を着るのはこんなにも安心できるのか・・・。だが大きい、おそらくは5から6人ほど寝られくらいの四角いベッドの上で綾子は靴をぬいで横座りしていた。そして脱がされる。地味なベージュ色の地味な形のブラジャーとパンツ。（日本にいたころから着物ではノーブラ・ノーパンだったが洋装のときはちゃんと着けていた。）

ブラジャーをとられた時綾子は「きゃ〜〜〜！」羞恥のあまり叫んでしまった。ここでは、長らく全裸で、暮らしていたが今夜服を着せられた事により。心が揺らいでしまったのである。

ここに来て割礼で陰核と小陰唇を切られて性器に入れ墨をされ、来る日も来る日も厳しい性奴隷としての調教それがただ服を着ただけで揺らいでしまった。

明るすぎるくらい明るいこの部屋の照明・・・。何時もの様に綾子が少年王の〝お情け〟を受ける。その愛娘達がルーンとラーディアが何時もの様に立ち会う「陛下・・・。後生ですから部屋の明かりを消してください・・・。恥ずかしいです」涙ながらに訴える。まるで処女の様に・・・。だが奴隷である彼女たいして王はルーンとラーディアに命じて押さえ付けた。

そ・し・て。

は地味なベージュのパンツを引きずり下ろした。「い、いや〜〜〜！！！」子どものように泣く妙齢の美女・・・・。彼女は両手で己の股間を覆った
それを少年王は優しく抱きしめた「紫牡丹・・・そなたは最近よく言えば大胆になった。私の腰に跨り雄叫びを上げながら自ら腰を振る事もよくある。でもこうして時々こうして上げると羞恥心を取り戻すのでよいと聞いたものでな。可愛いよ！紫牡丹。」

そして。ギュっと股を閉じ股間を両手覆う綾子に少年王は・・・まず両手で脚をこじ開け股間を覆う手を取り払った。その作業が進む中綾子は、涙で顔をいやいやと首を振り必死に抵抗するもルーンとラーディアの手伝いによりあえなくちょうどよい具合に筋肉と脂肪のバランスの取れた東洋人にしては長い脚は御開帳となってしまったのである。

亡夫により処女を奪われ、使いに使い込まれ三つ子の娘を産んだ性器。
朝・昼・晩と時間さえあれば嘗め回され、弄り回されそして陰茎を突き込まれた性器は既に割礼によりクリトリスもラビアも切り取られて、しかも紫色の牡丹の華の入れ墨が描かれている。かつて日本にいて割礼をされていなかった頃、結婚前に既に永久脱毛されてい

てツルツルの童女のような下腹部・・・。膣に男根を撃ち込まれ歓喜のあまり何度も獣のような雄叫びを張り上げ絶頂を迎えた事か・・・。白目をむいて涙を流して失神したことか・・・。

だが今、綾子は砂漠の国の少年いやまだ男の子という方が適切か・・。王様の奴隷となりその初々しいおちんちんを膣に受け入れている。精通は既に来ており何時〝当たり〟を引くか解らない。そのうち妊娠させられるのはもう決まりだ。だが綾子は・・・・。
綾子の上に覆いかぶさり一生懸命に腰を振る男の子を見つめる。そして一突き事に甘い声を上げる。クリトリスとラビアを失いすっかり鈍感になった性器・・・だが快楽がなくなったわけでもない。性欲もなくなった訳では無い。むしろ性感が鈍くなり、その反動で女ざかりを迎えた身体は性欲が燃え上っている。
「あぁ！！陛下ぁ！！愛しています、愛しています！陛下！」綾子は長い脚を王の腰に絡ませ背中に指を立てる。
（あぁ、後、少し・・・。）頭の中はわずかに残った思考力が絶頂を意識しだすだが、
王は顔をしかめる、そして・・・「うっっ！」大量の子種が送り出される。そしてぐったりと綾子に覆いかぶさる。

そう。綾子はまた今日も〝いく〟事が出来なかった。またもや〝蛇の生殺し〟だ

他の寵姫・・・こんどは恵の部屋に行き王が去った部屋で綾子は・・・ベッドの上にちょこんと座り股間から精液と愛液をたらしながら泣いていた「あぁぁ！誰か私に〝快楽〟を！〝快楽〟を！〝女〟に生まれてきた幸せをもう一度くださいぃぃ～！！」

閑話休題

王子と奴隷になったミカエラとアレンの会話

「では再開しますね」ルーンは広間で皆に言う。

王子の部屋で二人は、コーヒーとお菓子をご馳走になった。
カートに乗せて運んできたのは、先ほど王妃の間であった一糸纏わぬ26歳か27歳くらいの白髪に赤い眼をした女性だ。かなりの美女だがその表情は暗くよどんでいる。女性にしては大柄な体もやや猫背だ。カートのコトコト鳴るたびに大きな乳房が揺れる。

ミカエラとアレンはこれまで自分たちの身になにが起こったのかを話した。
王子は、涙を浮かべ深刻な顔で「なんと酷い事を・・・。」
ミカエラも「はい、頼れる身寄りもないし・・・。私はともかく弟のアレンはもう・・・男の子の一番大事な所を・・・。」
アレンはベソをかきながら。「ぐすん、ぼ、ぼく、もう男の子じゃないから・・・お姉ちゃんを護れない・・・だから王子さまぁ、お姉ちゃんを・・・!!!???」
ラセード王子の可愛らしい唇がアレンのこれはまた可愛らしい唇をふさいだ。そして王子の舌がアレンの歯の噛み合わせをこじ開け侵入しアレンの舌に絡みつく。菓子の甘い香りとナッツ類の香ばしさそしてコーヒーの香りが口の中で混じり合う。ミカエラは目が点になっていた。アレンは目を白黒していたが頭は真っ白だ（・・・・

？）王子は唇を離す。
アレンは恐る恐る年下の王子に言う「お、王子さま・・・あの・・・、ぼくは男の子なのですけど・・？」王子は潤んだ瞳と赤らんだ顔をしている。「以前はであろう？アレンよ！自分はもう男ではないと申したではないか」
ラセード王子はアレンの身に着けている床を引きずるような白いワンピースをめくりあげた。そこには陰嚢があったわずかな痕跡とすっかり短くなった陰茎の切株があった。もうこんなにも短くされては愛する異母姉の膣に突き入れるのも立ションも無理だ。

「うあぁぁ、王子さまぁ身，見ないでぇ〜〜。」慌てて隠そうとする。アレンは去勢されて以来自分の強烈な劣等感を感じていた。思春期にさしかかった少年は男性機能を失い毎日の排泄時、座って切株のような陰茎から尿をだし、毎日、朝晩かかさなかったミカエラをオカズにしてのオナニーも出来なくなった。睾丸を失い完全に腑抜けになった。それでもなお心のどこかで自分はまだ男の子だと思うところがあった。だがラセード王子は「アレンよ！無理をするな、そなたは！そなたは！これからは娘として生きるがよい」

この一言でアレンの心は砕けた。
ただ王子に抱き付き泣いた
そして「アレン、」「はい、王子さまぁ」甘えるような声で答える。
「そしてミカエラ」
「・・・・あっ、ハイ」あまりの成り行きに茫然としていたミカエラも呼ばれて我に返る
「ミカエラよ、そなたも酷い事をされているな！封鎖された部分を解放しよう」
ミカエラは嬉しそうに、ややコミカルな感じで「あ、ぁ、ありがとうございますぅ〜〜」と王子に涙ながらに感謝してひざまずいた。

生殖器を封印されるという信じがたい儀式ですっかり気弱になっていたので、優しくされて感激していた。

３人程度なら余裕で入れる大きさの湧いたお湯に満たされた風呂が隣にあるある部屋に連れていかれた。
そこでミカエラは全裸でお尻にクッションを敷き、上半身を畳んで重ねた毛布や布団をクッション代わりにしてもたれかかっている。長くスラリとした脚をＭ字に曲げている。

ミカエラは恥ずかしいのとこれから封印された性器の解放に期待している。「お、お願いします。殿下」震えた声で王子に言う。こちらも全裸姿のアレンが「お姉ちゃん頑張って！」笑顔で応援するミカエラは既に王子の子を産み、王妃としてハーレムに君臨する、そう心に誓っていた。それだけが自分達姉弟の運命を切り開く。

「では始めるよ、ミカエラ」王子は左手にかぎ状のフックの付いた道具と右手に糸を切る専用のハサミを持っている。
解放の術式はいたって単純なものだ。ついこないだ精通が来て割礼を済ませて間もない子どもにも、簡単に解放できる程度の処置で済ましてある。もちろんミカエラの痛みと羞恥心は深刻なものだしこの傷は決して癒えないだろう。膣を封鎖している糸を王子は尖端にかぎ状のフックついた器具で引っ掛けて少し引っ張る。それをもう一つの手で持っている小さいハサミで切る。それを数回繰り替えしていく。そして最後の糸がプツリと切られた。王子は余計な糸を

とりさる。ミカエラの性器の封印が解かれたのだ！
「ああっ」ミカエラの頬に涙がこぼれた。残忍な拷問の末にクリトリスとラビアを切り取られた性器が解放されたのだ。
「お姉ちゃんおめでとう！！」アレンが泣きながら抱き付く。元々気が弱く線の細い異母弟は、〟男の子〟ではなくされてしまってからは、さらに女らしくなってきた・・・を護るためにも。
「抜糸した所から少し血がにじんでいるな」王子は心配そうに言うと「とりあえずそこの湯殿で洗い清めるとしよう」

隣の大きな湯桶のある部屋に行く。

王子の服をミカエラとアレンはぎこちない手つきで脱がす。王子の小麦色の身体はまだ子ども、子どもしており、男らしさとは無縁だ。生まれたばかりの子羊を思いおこす。
だが股間の陰茎は隆々といきり立っている。まだ小ぶりでエラも張っていないし、陰毛も無い。だが亀頭は完全に露出している。異母姉弟は目を丸くした。ミカエラは（…もうじきこれがわたしのアソコに・・・赤ちゃんの元を注がれるの？・・・無理、無理、裂けちゃうよぉ！こんなの入るわけ・・・ないじゃない）と怖そうにしている。アレンは（も、もうじき僕のお尻にこれが・・・・。）これまた怖そうにしている。

局部をじろじろ見られて、王子はれ照れくさそうに「ふふ、割礼をしたからな。あまりの痛さに泣き喚いてしまったよ。傷が完治したのは数日前だよ。もう痛みはない。それにわたしは、既に精通は来ているよ！」

回想シーン。

ラセード王子は全裸で数人の全裸の女奴隷達に抱きかかえられて豪華なベッドに横たわっていた。そしてわずかな装身具付けただけのほぼ全裸姿の母である王妃の前で全身に10以上の乳房が押し付けられている。そして・・・王妃は「殿下が大人になられた！とのことですので、それを確認させていただきとうございます。」

そういうと南欧系のとの混血らしい『微光』と名づけられた一人の20歳位の見るからに淫乱そうな、ムチムチな体つきをしている一糸まとわぬ女奴隷が、慣れた手つきで優しくまだ割礼をしていない皮を被ったペニスを責め立てていく。彼女は王宮の踊り子でもあるので客をもてなす係りであり大勢の男達の前で淫靡な舞を毎夜舞っている。また、毎晩のようにその魅惑的な'身体,で男達の上で魅惑的なベリーダンスを舞っている。その百戦錬磨の性奴隷に手こきされている。彼女は本来後宮の'備品,の奴隷ではないが特別に王妃に呼ばれたのだ。

『微光』　は割礼を受けていない女だ。奴隷女は、本来割礼の儀式を受ける事が出来ないのだ。

そして「ぁあああ！」王子のせつなげな声と同時にブシュウとペニスの先から白濁液がほとばしった！食い入るように我が子の痴態を見つめていたが、王妃は突然下に崩れ落ちるようにペタリと座り込む。

そして声を上げて泣いた。「殿下ぁ！ご立派になられてぇ！嬉しゅうございます。遠くの国から連れ去られてこのハーレムに閉じ込められからこんなうれしいことはございませんでした！！！」

そして少し前に国王陛下に'お情け,をいただいて処女華を散らせたばかりの『黒真珠』という名で呼ばれる、まるでミルクチョコレ

ートの様な肌をしたアフ〇カ系の血を持つ１８か１９ぐらいの胸と尻の大きい全裸の女奴隷。彼女はラセードを弟のようにかわいがっていた。彼女によりなされた王子の二度目の射精を見届けると王妃は満面の笑みを浮かべた。
『アトリエ』と呼ばれる中央アジア系の血が強く見られる１３歳か１４歳くらいにしてはかなりの成熟したスッポンポンの、だがまだこの女奴隷は処女で男の物に触れるのはもちろん、見るのも初めて、の奴隷の少女は、顔赤らめ、涙を流しながら目をそらし、しごきたていた。

彼女は普段は後宮で王妃の侍女のような事をしている。普段男と会うことはほとんどない。面白そうなので連れてきたのだが初々しい反応が良いと王妃は思った。

その「アトリエ」という少女奴隷により三度目の射精をしてもまだ濃い精液をみつめて決心したような顔つきになり、

さらに一番年下の東洋系と思われる『夕暮れ』と呼ばれる、まだ９歳の幼い女奴隷にしごきあげられてく。勿論まだ初潮は来ていないが、どういうわけか国王陛下に気に入られ割礼を済まして傷が癒えるとすぐに寝所に呼ばれている。まだ子供なので夜に寝所に呼ばれる事はないが、昼過ぎに呼ばれその幼い身体を国王陛下の寵愛を受けている。
王妃と共に５から８人位で愛し合う事も珍しくない。王妃はよく見ていたが王の腕に抱かれその幼い肉壷から愛液をたらし王の肉棒を受け入れて喘いでいる幼いながら欲情した顔，女，だった

そんな「夕暮れ」の手により四度目の射精を終えた。王子はぜぇぜ

ぇと息をきらしている。

そして王妃は「殿下に割礼を」とおっしゃられた。

ラセード王子は女奴隷達により体を清められた。そしてベッドに腰掛けていると実母である王妃がやってきた。２６歳から27歳位のグラマラスな肢体長い黒髪に小麦色の肌、陰毛は綺麗に処理されていて股間に三日月の入れ墨。そして王妃というのはある意味あだ名のようなもの身分はあくまで女奴隷である。勿論、王家の男のイチモツを受け入れる為に割礼により陰核も小陰唇も切除されている。

「殿下・・・」「はぁ、はぁ、母上・・・？」

頭に宝石をあしらった黄金の髪飾り以外何ひとつ身につけていない王妃は王子の前に立っている。「殿下は大人になられました。その証の儀式をさせていただきます」

「えっ？」王子はにわかに脅えだした「そんな古い因習は・・・」

「皆の者殿下を・・・」そう言うと女たちは王子を押さえ付けた。

王妃はウットリとした表情で我が子のペニスを見つめた。「あぁぁ、ご立派になられてぇ。では一日でも早くお世継ぎを作れるように

「い，いやです・・・お母様・・・。や、やめてぇ・・」涙声で訴える王子。

王妃は息子のムスコを器用につまんで包皮を引っ張った。伸びた包皮に小ぶりの小刀の刃があてられる。刃が煌めいた！

『ぎゃぁぁぁ～～～！！！』

王子の悲鳴があたりに響き渡る。包皮が切り取られたのだ。初々しい亀頭が鮮血で赤くそまる。血が床にポタリポタリとたれる。

王妃の左手には切り取られた王子の包皮があった。

王子の成人式は終りをつげた。

回想終わり

あまりの事に姉弟は絶句していたが。

王子は既に全裸だったミカエラ、服を脱いで全裸になったアレンの股間をみて。「アレン去勢された部分は化膿しないように常に綺麗にしこの薬を塗っておくように」と指示を出した。
洗い場で自分の身体と性器とを洗ったミカエラは「あのう、・・・。王子様今夜から早速・・・」顔赤らめ恐る恐る聞く。
「いやミカエラまだ血が抜糸した後からまだ出ていたろう？身体を大事にせねばな！
「傷が癒えてからでよい。まぁ数日もすれば治るだろう今日は早く休みなさい」とほほ笑む。王子は二人を抱き寄せ「そうしたら３人で愛し合おう」

ある少女の決意

これを読んでいたルーンは、「ミカエラの発言が記されていますね」と一堂に言った。どんな会話かあったかの正確には記載されていませんが、ミカエラの話したことが幾つか書かれているようです。

「マラティ～～～。ハ～レムっていいわぁ～よぉ～。」

ハーレムにてミカエラ達との面会許可がでたマラティは、一人だけで王宮を訪問した。

石作りの王宮は、よく手入れがされているが、凄く古いものに見える。

ハーレムの質素だが、きちんとした手入れがされた客室の一つ。愛しいミカエラと面会できる。しばらくブリに会うミカエラ・・・・・・、

「！！！！」

が王宮の奥の奥ハーレムの手前に位置する豪華な応接室でミカエラが来るのを待っていたマラティ。

絨毯が敷き詰められている。その上にクッションがありマラティは座っている。

暫くぶりに会える事にマラティは、嬉しくて仕方がなった。

だがしかし、待合室の扉が開いた。彼女はその方向を見たとたん笑顔が消えた、

ミカエラが部屋に入ってくるなり彼女の姿に絶句した。

蒼みがかった長い銀髪をツインテールにしているのは同じ、だが・・・・・。人を出迎える客間なのに、ミカエラは・・・、ミカエラ

は。
なっ、なんと、〝裸〟だったのだ！
そして彼女は、恥じらう事もなく、それが当然というような態度だった。肌を露出することを嫌う文化で育ったたミカエラが、だ・・・・・。

ミカエラは、確かに裸だった！だがしかし、何も身につけていなかった訳では無かった。いや！全裸の方がまだましな姿だ。頭から少し青みがかった薄い布を被り、白い肌に直接装身具を身につけていた。
額に宝石のあしらったサークレット、何時、穴を開けたのか、耳にもピアス、宝石のあしらったにブレスレット・アンクレット。二の腕や太腿にもリング状のアクセサリーがある。腰にもチェーンを巻いていた。首に付けられたチョーカーと豪華な宝石のあしらったネックレス１０本の指にそれぞれ違う宝石のついた指輪。多くの装身具は。これまた金の細い鎖でつながっていた。白い肌に金色のアクセサリーが美しい。
ほぼ全裸と言っていい格好だ。
良く見れば少しは、生えていた陰毛も、綺麗に処理され、パイパンになったミカエラの〝女の子自身〟も丸見えであるにもかかわらず隠すそぶりもない。
しかもそこには、蝶々の絵が描かれていた。一番隠さねばならないはずの性器は剥き出しのままである。
女性器を隠す気すらない様だ。それどころか、ミカエラは、誇らしげに両手を腰にあて、両脚を肩幅に広げて誇示する様だ。その表情や姿から見て、どうやら裸同然の自分を自慢しているようだ。

何よりも、表情とか、雰囲気が、以前とまるで違う。かつての清純な所は、まるでなくなっていた。気怠そうな、退廃的な雰囲気、目

つきもまるで腐った魚のような感じだ。
ミカエラは、ニタリとほほ笑みながらマラティの前に座り、彼女を抱きしめる。そして身体を離すとアクセサリーをこれ見よがしに見せる。

「今日は、マラティに会えるっていうのでぇ〜〜、普段は、しまってある、アクセサリー―出してきて、気合入れて特別にオシャレしてきたのよ〜〜。えへへっ！可愛いでしょう〜〜？」
そう言うとクッションから立ち上がりバレリーナのようにクルッと一回転して見せた。二本の髪がつられて螺旋を描く。
「なにをしているの？なんで裸なの？ミカエラ服を着なさいよ」慌ててマラティは叫ぶ。

^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^
^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^
「あら〜ミカエラが裸だったのにマラティは驚いてしまったみたいですね」
日記を読んでいたルーンは、皆に語り掛ける。ここは、現代の近代的な、建物の中にあるハーレムの広間。
「そうか！何時も裸でいるなんて普通じゃないんだよね？」そう答えたのは、さやかという少女だ。
さやかは、16か17歳くらい、長い黒髪をポニーテールにしている。日本にいた時は綾子のメイド兼愛人だった。
彼女の容姿は、背丈は平均的だ。ここに来た当時は細身で筋肉質だった。他の女達と同様、捕らえられて、割礼でクリトリスとラビアを強制的に切り取られた。性感帯を失い若い性欲を持て余している。その性的な、要求不満を紛らわす為。さやかも他の女達と同等かそれ以上に、一日の決して少なくない時間を舞踊の練習や水泳等のハードな運動をするのだが、その為にお腹がすくし、かなり広いとは言え、ハーレムに閉じ込められ外界と完全に遮断されている囚人の

様なものだ。
その為に高カロリーの食事を大量にとる事になる。結果太るのだ。
決して肥満体のダラしない身体ではない。鍛えられた、健康的な体形である。食前に大豆プロテインを飲むなどして食欲を抑える努力もあるだろう。やや厚くなった皮下脂肪の下に強靭な筋肉があるせいで引き締まった感じである。
それでも、さやかは、腹の周りにある脂肪をつまみ「うーん、やっぱり昔も今もここでの生活は太るかぁ〜」とそこらのアイドルなど太刀打ちできない可愛らしい顔が歪む。年頃の少女だから仕方がない。
「まぁ、仕方がないわ！割礼をされたわたし達は、オナニーは、もう出来ませんし、閉じ込められているストレスは、運動でかなり解消できますが、運動を通じての性欲の解消は限界がありますし」そう言ったのは恵美だ
恵美は、さやかより1歳年上の娘だ。彼女は、勿論全裸だった。だが、まるで原始人様ないでたちだが、その中に文明を感じさせるものがあった。眼鏡だ！恵美は眼鏡をかけているのだ！「運動でのカロリー消費にも限界があります。ですが」恵は、さやかの剥き出しの乳房を背中から鷲づかみにした。「日本にいた時よりも更に大きくなったわね！？」
さやかの大きな乳房は綾子には、まだ及ばないが十分巨乳である。
「もう、やめてよぉ〜〜〜　！恵ぃ〜〜〜　！
最近は、ダンスの時は、練習はブラジャーで固定出来るけど、本番はノーブラだから痛くて死にそうだよ！それに腕を動かすのに邪魔で仕方がないよぉ！」と迷惑そう。
「そうなのよね。さやか、みんなの前で日記に出てきたミカエラの装身具を着けただけの姿で踊るのはどう？」と恵は言う。
「そりゃ！とても誇らしいよ！この身体を皆に見てもらえるんだからぁ！」とムッとしながら答える。さやかは思い出す。プラチナのアクセサリー、顔にどぎついメイク。スポットライトを浴びて全裸

同然の姿で汗を滴らせながら舞い踊る。拍手喝采を浴びる事が出来る。代わり映えのないハーレムの生活のなかでたまらない刺激である。

激しい動きに合わせて後ろに束ねたポニーテールと大きな乳房がこれまた激しく暴れる。
「慣れるのは、こわいですね？衣服を身につけると、とても窮屈ですわ！服を身につけなないでよい。というのは逆に考えるとこれは、皆さんたち寵姫の特権ですわ」そういってほほ笑んだのはルーンだ。ルーンは金髪碧眼のペルシャ系。さやかと同年代の美少女だ。さやか程の巨乳ではないがグラマラスな体形をしている。シミひとつない白い肌・・・・・・。きっとミカエラの肌もこんな感じだったのだろう。股間に印された、入れ墨も色違いだが同じ蝶々だ。彼女は、寵姫ではなく、元高級娼婦で今は、日本人の監視役兼世話係だ。ハーレムと外の管理部門との連絡役などもしている。本来なら別に服を着ていても良いし、連絡役なのでハーレムの外によく出るので、着ている方がいいと思うが、ルーンは気にしなかった。
ルーンは再び日記に目を向けた。

^^^

再び昔のハーレムの一室。絨毯の敷き詰められた床ぺたりとクッションに座ると、澱んだ瞳のミカエラは、答える。
「う～ん？あぁ！これね！驚いたでしょ～！私も最初はびっくりしたよ～！ハーレムじゃ、私たち奴隷の寵姫は、何時も、何処でも、大概スッポンポンだからねぇ～。ま～ぁ、別にぃ、スッポンポンじゃなきゃいけないって、決まりがあるわけじゃないし～。必要なら

服を着ることもあるし～！」
笑顔で答える。
「それなら服着なさいよ！見ているこっちが恥ずかしいわよ！」
と、マラティが恥ずかしそうに叫ぶ。
「でぇ～～もぉ！普段は、王妃様からしてスッポンポンだからねぇ～。初めは、私たちは、白とか、青とかのくるぶしまである、ワンピース着ていたんだけどねぇ～。でもねぇ～、王子さまがねぇ～。寵姫の正装は、裸なのに何で私たちが服を着ているのか？て聞いてきたのよぉ～。そりゃ「恥ずかしいからです」って答えたの！そしたらどうしたと思うマラティ？」

「ど、どうしたのよ」困惑した答えが返る。

「ふふっ！なぁ～んとぉ！王子様！そこでいきなり後ろを向いて、服を脱ぎ始めたのよ！驚いて見ているうちに王子様、生まれたままのカッコになっちゃたのよ　！ふふっ　！マラティ、驚いたでしょ？それでねっ！王子さまったら、こちらに振り向いたら内股になって両手でオチンチン隠しているの！可愛らしい顔を真っ赤にしてこう言うったのよ」

『ミッ、ミカエラぁ、アレン、ウン。たぁっ、確かに、人前で裸になるのは、恥ずかしいなぁ！服を身につけないというのは心細いなぁ。特にお前たちの様に肌を露出する事に抵抗がある文化で育った者達には尚更だろう？無理矢理に連れ去られた事もあるだろう。だが王子であるわたしも後宮にいる時は、裸ですごそう！可能な限りお前たちの羞恥心を分かち合おう。わたしの愛するその美しい身体を皆に見せてやって欲しい』

「そう、言ってくれたのよ！感激しちゃった！」ニコニコしながらミカエラは、答える

「感動しちゃった！て貴女それでどうしたのよ？」困惑したマラティは呻くように言った。

「そりゃぁ～！迷ったわよ？あの頃はハーレムに入ったばかりだしね！王子様の前でも恥ずかしいのに、他の人達のまでいるのに裸になるなんて、絶対出来ないって。思ってたわ！王子様は、気まずくなったのか、そそくさと帰っちゃうし。私とアレン君とで話し合ったわ！それでね！」と可愛らしく笑うミカエラ。

「それでぇ・・・・まさか。」さらに困惑したマラティ。

「翌日、後宮に来た王子様を私たちは、出迎えたわ。正装して勿論英国風じゃなくて〝生まれたまんま〟の格好で　！でもでもぉ～さすがに胸とアソコは手で隠していたわよ？今じゃ考えられないけどねぇ～。」
ミカエラは、思い出した、今では、王子に愛される身体を誇示する自分だが、左手で胸を右手で股間を覆う。全身は、朱に染まり涙目であった。
「・・・・。」マラティは声にならなかった。

「もう、王子様、感激しちゃって泣きながら服を脱いで私に飛びかかってきて、皆の見ている前でいきなり。赤ちゃん作ろう！て叫んで、始めようとするんだもんびっくりしちゃった！でも私怖くて恥ずかしくて泣いちゃった」
その時ミカエラは、「み、見ないでぇ～～～～！」と叫んでその場から逃げ出してしまったのだが。
「ふう」と息をつくとミカエラはマラティの手を取り真剣な顔で言う。
「まぁ、その後、王妃様達のご指導と言うか・・・。王子様の寵姫

としてどうあるべきか！という事を厳しくしつけていただいたわ・・・・・・。本当に辛かったわ　！ハーレムの一員になる為には、今までの私の生きてきた価値観を全て否定さて・・・・・。全く新しい価値観受け入れて新しい自分にならなければいけなかったの！」目を伏せてミカエラは言った。

マラティは心配そうにミカエラの手を握り返す。

「それでね！王妃様に色々教えていただいて、ある日気づいたの。」と言うミカエラの発言にマラティが反応する。

「気づいた？何に？」

ミカエラは高い天井に顔を向けてから言った

「服って防寒とか必要のある時以外に、着る意ってあるの？という事とぉ。それと、服はこれまでの私なんだって」

「？」マラティはきょとんとする。

「私は、以前は、お嬢様、というものだったわ　！でも今は只の奴隷でしかないわ。私は、王子様達の庇護の元でしか生きてはいけないわ。もう故郷にも帰れないわ　！だからここで暮らす為にも今までの自分と決別しないといけないの　！　そう思ったの。そして気が付いたら私は、裸になっていたのよ　！」

「ん〜〜？まぁ、なんやかんやで最初は、恥ずかしかったけどぉ〜。何度も言うけど、なれると楽だよぉ〜？裸は〜！ハーレムじゃ、私たち寵姫は、裸でいるのが普通で服を着ていると逆に変なのよねぇ〜〜？昔はコルセットでぎちぎちに締め上げていたから、この解放感、最高よねぇ〜！」とカラカラ笑う。

クッションから立ち上がり一度背を向けてから腰に手をやる。ミカエラの尻がマラティの目の前に現れる。

振り向くと。

カエラは、今までの退廃的な笑顔はなく、元気にニカッと笑う。そして敬礼すると。

「そう言う訳ででぇっ！こ〜のミカエラさんはっ！豪華なドレスと一緒に、深層のご令嬢というというか人間のプライドとかいう余計なモノを脱ぎ捨てて、心も身体も、生まれたままの姿になって、王子様のペットとして楽しく暮らしているわけよ！」

「ぺっ、ペットって貴女人間でしょミカエラ！！！」とマラティは叫ぶ。

ミカエラは、気にした様子もなく

「そりゃ、私は人間よ　？でも王子様のペットに成れて幸せよ　？責任もないし難しい事考えなくていいし、全部王子さまがきめてくれるしね！」

それに、えへへっ！綺麗でしょぉ〜〜。この宝石や金細工ぅ。王子様にいただいたのだよ〜　？こんな凄いアクセサリー。昔の私なら一生、手にいられなかったわぁ〜〜〜。」

嬉しそうに、全身の光り輝く大きな宝石のついた装身具を見せる。

「・・・」マラティは絶句してしまった。それは変わり果てた友の様子に対するものではなく、その宝石に食い入るように見つめていた自分自身に対する驚きであった　（これ！もらったの・・・？私も欲しい・・・。）

マラティは首を振り、気を取り直して話を続ける「・・・。ミカエラ・・・・・・。貴女少し太った？」

ミカエラが全裸という事でびっくりしていたが、少し落ち着いてきたのか、ミカエラを観察する余裕が出てきた。元々、かなりの痩せ型だったが。いい意味で筋肉と体脂肪が増えたようだ。

腰つきも、大きくなった。コルセットのせいもあり細すぎた胴回りも少しだけ太くなった。肥満体ではなく健康的な体つきになったの

だ。
ミカエラはうなずいた「うん、少しね　！食べる量も増えたけど、それよりも、ため池で歩て、舞踊の練習とかも結構ハードに運動してるんだよ？」
と言うとミカエラは、踊り始める。身体をくねらせる用に最初は、ゆっくりとしかし段々と激しくなっていく。

により股間に何かの絵が書いてある。緑色の蝶々だ。
「あ、あなた・・・それは・・・？？？それに何て所に絵を描いているの？」
「あっ？これぇっ？コレはね刺青だよ！奴隷の印で王子様のペットです！という証明」
マラティは驚愕している。そしてヘタレ込んでしまった。あまりの異常な事態についていけなくなったのだ。

そして暫くして、マラティは、はっ！としたようにミカエラを見つめると。「ミカエラ！ハーレムでどんな事をされたの？アレン君は？」
「それはね・・・まず私、なんだけど」
ミカエラの回答は、さらにマラティを驚愕させた。

既に、ミカエラは年下の王子さまに処女華を散らされたという事をマラティに告げた。
「やぁ～、もう大変だったわよぉ～、まさか閉じたの解放してもらって終わりだと思ったのに、大事な所に入れ墨をしたんだよ～！その時の傷が治るまで王子さまも我慢してくれたけどね。まぁアレン君とキャキャ・ウフフずいぶん仲良くしてたけど～～～。」
「わたしは、初めてじゃない？　それに王子様も女の子方の穴は初めて。だからみんなに協力してもらったのよ？　朝ごはん食べた後に。それでハーレムの大広間でね、みんなが見守る中ね。裸で生活するのに慣れてきた頃だったんだけど。さすがに恥ずかしかったわ！」
他の奴隷の娘たち、もちろん私と同じで皆スッポンポンよ！　に背中をしっかり押さえてもらって、右手をアレンに握ってもらって。‘おねぇちゃん頑張って‚言ってくれたのよ！王子様も王妃さまに服を脱がしてもらって裸になってね！」
「それで私に覆いかぶさった王子様を、背中ら全裸の王妃様が、おちんちんを掴んで、私のここに導いてくれたのよ！割礼で皮はとうに無くなっていて尖端をあてがうと王妃様が腰をグって押したのよ！そしたら。ブスッ！一気に奥まで入ちゃったのぉ！もう裂けちゃったかと思ったわ！」
「でね、王子様、2回か、3回腰を振ったらね！急に苦しそうになってそのまんま・・・。男の子ってイク時に息止めるのね！それで精液がドバッ～て、出るでしょ？そうするとお腹の奥が凄く熱くなるのよ！まぁその後しばらく休んでから私の腰の下に敷いていた厚手のタオル、破瓜の血と精液の付いたタオルを持って王様をはじめいろいろな所にあいさつ回りよ？王子様が、無事に筆おろしが終わ

りましたって！　私の方も、もうじき王子様の筆おろしした女奴隷です。って挨拶する会があるらしいんだけどね。」

「それとね！　アレン君はね！　」

「そうよ！アレン君よ！アレン君はどうなってしまったの？」

パドマは、心配な顔で話した。

「パドマ、貴方も知っての通り、おちんちんはもう無いでしょ？それでね、すっかり腑抜けになっちゃったのよ。

私も最初は、心配して王妃様に聞いたらね。こうおっしゃられたわ」

ミカエラは、以前に王妃に聞いた話をパドマにした。

「ミカエラ！　アレン君の事が心配で仕方がないのね！　でも大丈夫よ！　男の子はね、誰でも、金玉を抜かれるとそうなるのでダイジョブ。だって。男の子として扱うのは可哀想だから女の子として扱う事になったの。だから今はもう弟じゃなくて妹なのよ～　！一応名前だけだけど。」

一方その頃

「昔はタマを抜かれたてしまったとか、さらに、おちんちんも、ちょん切った奴隷も大勢いたらしいわ。今は、一応アレン君の他は刑罰としてちょん切られた十数人しかいないみたい。あっ、アレンは、今頃は、王子様と二人きりでプールで、水遊びをしてるわ。」

「王子様〜！」それにラセード王子は振り向く。いたそこには王子の奴隷であり恋人でもある寵愛する、一糸まとわぬ白人の青い瞳の美しい少年がいた。

アレンは、ここに来てからかなり金色の髪が伸びて肩まである。白い絹のような肌。長い手足。とても元男の子とは思えない。容姿がさらに少女的になっていた。股間に惨たらしい去勢処置の跡がなければ飛び切りの美少女だ。王子も全裸だ。王子は黒い髪と瞳に少し小麦色それの肌の色をしている。

そしてアレンの切残し陰茎がまるで切株の様にある。もう立ションは無理だ。だが、このおかげでアレンは、愛する異母姉であるミカエラとの近親相姦の罪を犯さずに済んだのだ。今は救われたと信じている。ソレが明らかに、自己主張を始めている。まだ勃起ができる部分が残っている。かろうじてだが。愛する主人である王子に見られて顔を赤らめる。王子ははにかんだ。アレンが視線を下に下げると王子のペニスも勃起している。そして。二人は抱き合い暑い口づけをかわした。「殿下それでは歩くのに都合が悪いでしょう」そういうとアレンは、王子のペニスを愛おしそうに口にくわえた。チュパ、チュパと音がハーレム鳴り響いた。

面会を終えてマラティは・・・・。変わり果てた愛しいミカエラの姿を思い出していた。

ミカエラと面会をした時に、王妃を交えて３人で食事をした時、パドマは、いささか閉口した。ミカエラは、もちろん給仕の女達も

裸・裸・裸・・・皆全裸同然のいでたちだった。何よりも驚いたのは、王妃様とミカエラから紹介された２０代半ばから後半とおぼしき美女でさえ、頭に宝石をあしらったティアラだけの全裸だった。服を着ている自分の方がおかしいのではないか？そう思えてくるほどだった。

別れ際に王妃がマラティの手をとり告げた。

「マラティさん、貴女ミカエラさんの様なスレンダー美人とは、また違った女の子ね？ゼヒ貴女もここの住人になって欲しいの！ミカエラも愛する貴女がいないのは寂しがっていましたわ」すると王妃は、マラティに告げた。
「この、ハーレムでは、女同士で愛し合うなんて普通の事ですわ」ギョッとしてマラティは睨んだ。ミカエラは、ちょっろっ！　と、舌を出して、肩をすくめた。
「ごめぇ～ん！全部話しちゃった！」
王妃は続ける。
「」
王妃は、マラティを抱き寄せた。マラティの顔は、何も身につけていない大きな乳房の間に包まれた。
「貴女の愛するミカエラさんと一緒に、私の大事な王子さまへ、貴女の今迄守ってきた大切な処女を捧げて欲しい・・・・。」
言い淀み、王妃は、言い直した。
「いえ、処女だけでは、ありませんわ！　処女以外の貴女の全てを捧げて欲しいの！昔に比べてこの宮殿のハーレムの規模も随分と小さくなりました。寵姫達の数も僅かな人数しかいません。欧州人の高貴な姫を奴隷にできたのは何時以来でしょうか？　そのような中ミカエラとアレンの様な美しい二人を迎える事ができたのは、偶然

とはいえ、とても明るい話ですわ！　」
王妃はミカエラも抱き寄せる。
「そして、マラティ、貴女がミカエラと愛し合う関係だったのは、幸運でしたわ！この閉ざされた世界では、心から信頼できる仲間が一人でも多く必要ですわ！　そうだ！　良い事を思いついたわ！貴女方、結婚しちゃいなさいよ！　そして夫婦として王子様の・・・・・。いえ王家の子孫繁栄に力を貸して欲しいの！貴女の香辛料の様な褐色の肌とミルクの様なミカエラの白い肌の対比はとても絵になるわ」と。
マラティは、あまりの事に答えに窮してしまった。それにしても女同士で夫婦なんて・・・・。
「あの・・・・。その・・・・・・わたし・・・そのぉ・・・・・。ここに入るには、確か割礼とか、大事な所に入れ墨とか・・・・・・、痛いのは・・・・・、裸で生活とか・・・・・・・、恥ずかしいしぃ・・・・・。子供を産めとか・・・・・・・。」
王妃は微笑みながら「驚かせてしまったようね？　確かに、割礼や入れ墨は、怖いと思いますわ。おマンコを切られる、あの痛みと恐怖は、私も忘れられませんわ！　その傷が治れば奴隷の証として、大事な所に、消える事のない入れ墨をされる。そうして人間としての尊厳を捨てて、初めてここの住人になれる。勿論、貴女がここの住人なる時は、割礼も刺青もしていただきますわ！　そしてこのハーレムの住人になれば貴女は、人間では、なくなり、王子様のペットとしての余生を過ごす事になりますわ。つまり性感帯も、自由も、人としての尊厳も、すべて捨てていただきますわ！　そのみかえりとして、十分は、とても言えないけど金銀財宝や安楽な生活をお約束しましょう。そしてお二人の結婚式もささやかですが開きましょう」

マラティは、混乱している。当然だろう。
「む、無理です・・・。」立ち去ろうとするマラティ。その背中に王妃は、先頬度より大きな声で続けた。「その気になったら直ぐにいらっしゃい。私は、必ず受け入れたくれると確信しているわ。」王妃は、そう遠くないであろう将来のハーレムの情景を次々とイメージしていく。そして、その事をマラティに投げかけた。
「マラティ！私には見えますわ！　割礼や刺青等の一連の儀式終えて、晴れて私達の家族になった貴女の姿を！」
「貴女の褐色の肌、大きな胸、引き締まった腹、大きなお尻。貴女は、私達と一緒に、一糸まとわぬ真っ裸でハーレムを闊歩する姿！」
「　私やミカエラ達の見守る中で王子様にまたがって、自らの手でオチンチンを、おまんこに受け入れるのそして自らの意思で腰を下ろして処女を散らすのよ！」
「その、大きなおっぱいを揺らしてそして、一生懸命に腰を振って王子様にご奉仕するの！」
「やがて子種を子宮に注がれる。全身汗まみれで荒い息ずかいの貴女の姿が！」
「それがはっきりと！」

ハーレムからの帰り道。、あの異様な世界での事を振り返っていたマラティはふと我に返った。
全裸で恥ずかしげもない。ミカエラの様子。ハーレムの淫靡な空気により以前の清純さなど微塵も感じさせない、女奴隷，になってい

た。
そして、彼女がもらったという高価そうな宝石やら装身具。それを見つめるときのミカエラの物欲に満ちた毒々しい眼。王子の寵愛を受けてあきらかに増長しているのがわかる。それまで酷い目にあってきたのだ。それはある意味仕方がない。

あんなにも清純で清楚だったミカエラ・・・泉のほとりや部屋の寝室で何度も愛し合ったミカエラ・・・何度自分はミカエラの股間に顔を埋め嘗めまし、逆に嘗めまわされたか・・・。そう思いつつもマラティの思考は、そんな事よりも何よりもマラティの心は・・・「あの宝石・・・私も欲しい。」ハーレムで出された豪華な食事・・・。「美味しかった！もっと食べたい！」

欲がマラティを支配した。今はパドマと一緒に王宮の外周りの清掃等の仕事をしている。裕福と言えるような状態ではない。「あの夢のような世界に行きたい・・・」そう思わせるのには経済的な事情も大きかった。

だがしかし・・・

マラティを引き留めたのは、ハーレムに入る為の儀式だ。

割礼という陰核と小陰唇の切除・・・そして性器を中心にした入れ墨。その苦痛はどれほどのモノであろう？
ミカエラがあの時、切られた後。マラティは献身的に看病した。ミカエラのあの痛がりよう・・・。どれほどの苦痛だったのか・・・？もし自分がされたら・・・冷や汗が出る。

「でも・・・あの生活が手に入るのならば・・・」

マラティィ割礼される。

そして、王妃は、何時も通り。正装に身を包んだ
「あらぁ？何かしら？マラティィさん？」と呟いた。
ィから再度、面会の申し込みが王妃にあった。それを聞いた王妃は、
ミカエラとマラティィの衝撃の再会から幾日も経たぬうちに、マラテ

この国のハーレムで飼われる王続の子を産む為の女奴隷達に許さ
れた、数少ない権利を行使したのだ。
人前で、全裸でいる名誉。
つまり王達の寵愛と自分の美しさをアピールする事でもある。
王妃は、全裸に豪華な装身具を身にまとい応接室に向った。
そこで見たものは。
マラティィがひれ伏していた。一糸まとわぬ姿で。
王妃は全てを悟った。
マラティィが、降参した事を・・・・・・。
一人の人間としての尊厳と自由・・・・・・。そしてクリトリスと
ラビア！！
それとハーレムでの豊かな生活とミカエラへの邪恋
二つを秤にかけた事を・・・・・・。
マラティィは後者をとったのだと。
王妃は理解している。自分もそうだからだ。だがあえて聞く
「マラティィ？お分かりですよね？貴女はこれから大事な、大事な、
『おまんこ』を壊されて、このハーレムでの身分は、人では無く、
家畜になるのよ？そして式典などがあれば裸で出席するのよ？」
マラティイは震えた声で答える「・・・。は・・・。い」

ここは王宮とハーレムの間にある婦女子専用の割礼室そこに大勢の女達がいた
その中にマラティがいた。彼女は全裸だった

マラティは入浴を済ませた後、服を着ないでここまで来た。何時もは長い黒髪を三つ編みにして、首の後ろにたらしているが、今は洗った後なので解いてある。結んでいたせいでややウエーブがあり背中全体を隠すようだ。褐色の肌は緊張で汗をかいている。濃い顔立ちだが、とても可愛らしいのに今は恐怖で引きつっている。年に似合わない大きな乳房は全身の震えで小刻みに揺れている。

親友でありある種の同性愛的な関係にもあるミカエラに『止めるのなら今のうちよ?』と言われたが決心は揺るがなかった。

あの暮らしが手に入るのなら・・・。マラティは性感帯と自由を、贅沢な暮らしと虜の身になる事を天秤にかけた

そして悩みに悩んだ末、贅沢な暮らしが出来るのなら自由もクリトリスもいらない。女の子の大事な所への入れ墨だって我慢できる。大好きなミカエラといたい。ハーレムの女奴隷になる決心をした。

そして・・・・儀式は厳かに滞りなく行われるはずだった。

寝台に寝かされたマラティは、褐色の肌をした両脚を大きく広げられ固定された。
綺麗に剃毛された性器が皆の前にさらされる。同性が大半とは言えあまりの羞恥心に眩暈がしてくる。既に去勢されて男の子ではなくなったアレン・・・既に髪も長くなりすっかり女の子の様になったアレンも
いた。
心配そうに見ている。

（あぁぁ、ミカエラにしか見せた事無いに・・・・。）ミカエラに何度も顔をうずめられて嘗めまわされた事か・・・。

まずは、女奴隷でもある王妃により、マラティの性器を詳しく検査された。

「皆さん、間違いありません。この娘は処女ですわ！」

「では〝罪の芽〟を切り取る儀式に取り掛かります。その汚れたモノを股間で育ててきた罪を贖うのです。」

そして恐怖の為か、縮んでいる。とうか寝ている、クリトリス。
それを王妃は、舌と唇で丁寧に、丁寧に、刺激する。マラティは

無理矢理に、性的に覚醒させられた。
クチャクチャと音が鳴り響く

「あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あぁー！きっ、もちいいよぉー！」

マラティは陰核への刺激に興奮しだす。全身を悶えさせている。

「あぅ！ちゅ！ちゅごい、らぁ、らめぇ～～～！！！」

マラティはイった。目から涙を、流し涎をたらしゼイゼイいと荒い息をしている。
股間から愛液をダラダラと流れている。

それから・・・・・。

　まだ若いのに白髪に白い肌をした全裸の女が執刀する。
股間にアルコールがかけられる。
鉄のピンセットで充血してパンパンに膨れ上がった大きな陰核を摘み上げる。

　マラティはまだボぉ～としている。だが股間がスーとするので意識がはっきりし始める。
「歯をくいしばって！10数えたら切るからね！止めるのなら10という前に言ってね。」
「1、2、3」（あっ！そうか、わたし・・・）
カウントが始まる。
「4、5、6」
凄い緊張が張り詰める。急に意識がはっきりしてきた。マラティ

は陰核切除を前に動揺を始める。（止めるなら今のうち。）
「7、8、9・・じ・・・ゅ」
（ど、どうしよう？）
（い、いやだ。やっぱり、『陰核を取る』なんてぇ！いやぁ！）恐怖で涙が流れおちる

「やっ！やぅ！やぁ！」

「10」刃が強く引かれる

「や、や、やっぱり許しぃっ！Q”W#E$R%'U（I）OP=ぐえぇ～～～」
悲鳴が部屋中にこだまする。
同席した女達は、かつて自分の股間にも同じ儀式がされた時の痛みを思いだした。

ほんの一瞬、いや刹那、遅かった！この日、この瞬間、女の運命はきまった。

マラティの股間から陰核が切り落とされた。血が噴き出す。

「ぎゃぁー～～ぁ～～～い、痛い、痛い、痛い。お、お母さーん」
マラティは泣き叫ぶ。余りの激痛に、拘束されながらも、激しく全身を揺さぶり暴れる。

そして彼女は幸運にも気を失った。
周囲がざわつきだす。
だが白髪の女は意に介さず小陰唇を二つとも切り落とした。そしてこの痛みが気付け薬代わりになったのか？
マラティは意識を取り戻した。股間に炎のような痛みを感じる。

マラティはこれにより一応奴隷の仲間入りをしたのだ。

そして・・・。傷口にアルコールをかけられて、尿道にストロー状の管を入れられる。包帯が巻かれた。

マラティはまた気を失った。

マラティ奴隷になる

ハーレムの一室マラティは意識を取り戻した。
「ぐくぅ」
股間に激しい痛みが走る。
股間に白い包帯が巻かれている。

「あら目が覚めたのね。マラティ」青みがかったプラチナブロンドの少女ミカエラである。
彼女は、僅かな装身具をつけているが、ほぼ全裸姿で、心配そうに見つめていた。

全裸は、このハーレムでの女の子の奴隷の正装である。この姿のまま国の公式行事にも出られる。チョーカーは、王太子の寵愛を受けるペットの証である。

そして「ばか！ばか、ばか！」怒鳴る「たいした決心もないなら儀式を受けるなぁ〜〜〜！」
ミカエラは涙ながらに言う。
「突然、呼ばれて行ってみれば、貴女が全裸で縛られているじゃない。これからはもうここからは出られないのよ！！！」

「ふう、良かった」
「えっ？」驚くミカエラ
「だってミカエラ私の事で本当に怒てるんだもの。前に会ったときまるで別人のようだったから」

「そ、それは・・・。もう知らない！」
ミカエラは頬を膨らまし腕を組んでそっぽ向く。マラティはミカエラを良く見ると全裸に少しの装身具を着けただけの姿だ。

マラティはそれを見て内心（すぐには無理でもいずれは、私もあんな宝石を・・・）黄金に宝石をあしらった装身具を身につけてミカエラと二人で、全裸でハーレムを闊歩する未来を思い浮かべた。

「マラティ、貴女の事は動けない間、私がお世話をするわ。」そしてミカエラは、マラテイの唇に自分の唇を重ねた。
「マラティ、こんな事に巻きこんじゃって、ほんとうにごめんんさい！」ミカエラは涙を流した。
マラティは微笑むと「ミカエラ謝らないで、故郷を捨てた事も、さっきの儀式で、女の子の大事な所に刃物を入れられて、クリトリス、とラビア、を割礼されて、切り取られてしまった事も後悔がない、なんて言えば嘘になる。けど間違ったとも思ってないわ」
「マラティ・・・・」ミカエラはマラティを愛しそうに抱きしめる。
二人とも肌着など着けていないの白いの少しは大きくなった乳房と褐色の大きな乳房が密着する。
「ミカエラ・・・もう置いてけぼりにしないでね！」と涙を流して微笑む。
ミカエラも微笑みながら「こちらこそ」
それから、傷が塞がるまでミカエラは、献身的にマラティの世話をした。

この間、王子の世話をしていたのは主にミカエラの元弟のアレンである。
完全に去勢された哀れな少年は、元々ただでさえ女の子ぽかったのにここきて更に女の子化進んだようだ。アレンの役職は、王子付き

の侍従でありハーレムの宦官である。ハーレムの女奴隷と違いハーレムの区画以外にも出入りはかなり自由である。

ハーレムの女奴隷の中で姉のミカエラは王子にの寵愛を一番受けている。それは間違いない。それほど女がいるわけでないし、なにより国王である父からの贈り物である。精通を迎えたばかりの男の子である。ミカエラは、よく王子に使っていただいた。

王子は、ハーレムの区画内なら何処でも、何時でも、ミカエラはクリトリスもラビアもない性器に自分の子種を注でいた。朝起きるとすぐに、生理現象でいきりたったペニスをミカエラの膣に突き入れた。朝早くからミカエラの可愛らし高い声が響きわたる。

そんな事は日常茶飯事だ。中庭の木陰で樹の幹に手をついて、お尻を後方に突き出した、ミカエラを、後ろからついている光景も良く見られた。「み、みんながぁ、見てますぅ〜、お、お部屋にぃ〜、かぁ、かえいまひょぅ〜。」羞恥心から泣きながら哀願するミカエラ。まだ性行を見られるのにはなれていなかった頃だ。その後、慣れると誇らしげに王子の相手をつとめた。

ミカエラの最大の使命は王子の子できれば跡継ぎの男の子を産むことであるが、立場はあくまで奴隷である、ペットなのだ。総合して言うと身の周りの世話をする性欲処理機能付きのペットである。王子あってのミカエラである。

だがハーレムの外には原則として出られないので外での用はアレン

が担当していた。勿論衣服は現地のちゃんとした服を着ている。ただし女物だが。

そして傷が治るとマラティは第二の試練があった。
この国の奴隷女は、原則として、割礼の儀式を受ける事を許されないのだが、例外的に名誉ある割礼を許された奴隷女は、国の公式な書類に書かれて保存される他に、外性器を中心に入れ墨がされるのだ。
一瞬でおわる割礼と違い長時間にわたる為に、こちら側の方がつらいと言う者さえいる。
陰核をつけている事は、罪と考える文化で、割礼をされた女奴隷の証であり。とても名誉なことなのだ。本来は割礼を許されない他の女奴隷達からは嫉妬と妬みの対象になるはずだが、入れ墨をされるさいに苦しむ姿はその他の女奴隷を恐怖させるには十分である。むしろ気の毒がられるくらいだ。こうやって酷い儀式・・・、というより最早、拷問である・・・を見せる事により、これからハーレムの一員になる者としての通過儀礼であり。王家の者寵愛を受ける者への嫉妬や妬みをそらすためのモノでもあるのだ。

だがもう一方で、医師から最終確認で性器の傷を確認された。そして・・・・。

マラティは股間をいじる。もうそこには陰核もラビアもない。

「うあぁ～～～！無い！無い！もう無いんだぁ～～～」声を張り上げて泣いた。その声はハーレム中に響いた。だがハーレムの女奴隷達は誰一人、彼女に同情しなかった。なぜならここにいる女奴隷達が、ほぼ全員が同じ道を経験してきたからだ。ハーレムの住人になる為には勿論。この国に生まれたからには、女は陰核と小陰唇を切り取られるのだ。この国の女達の中には稀に生涯陰核快感は、オルガズムも知らずに生きる者さえいるのだ。

だが女奴隷達のなかで、幸運にも、陰核快やオルガズムを知るもの達は、己の股に手を当てて、失ってしまった«肉のルビー≫の与えてくれた輝きを思い出して涙した。

全裸で拘束されたマラティをこちらも一糸まとわぬミカエラがしっかり抱きしめて勇気づける。

股間に一針、一針、刺される事にマラティは悲鳴を上げる。入れ墨は始まった頃は太陽が天にあったが終わった時は、日が傾いていた。

作業が終わると股間は血まみれだ。数日間マラティは痛みと高熱に苦しんだ。ミカエラは彼女を懸命に看病した。

　後日、マラティはハーレムでお披露目された。マラティはこのハーレムの少女奴隷の正装をしていた。つまり、まっ裸だ、首にチョーカーを着けていた。王子、つまり彼女の所有者である王子の名前が書かれていた。教えられたとおりに腰を下ろしてから、クパァ、と脚をM字開脚して性器を先輩の女奴隷達に見せる。股間には「睡蓮」の花が描かれていた。
「皆さま方ワタクシは本日マラティと言う名を捨て睡蓮となりました。宜しくお願いします」

こうして王の客人、マラティという少女は、消え去った。そして王子の新しい女奴隷『睡蓮』が誕生したのだ。

一方その頃もう一つの悲劇が始まってた。パドマがハーレム内に無断侵入して捕らえられたのだ。

去勢される少年の話

「えっ？？？裸ぁ？」

　パドマ少年、は王妃の部屋に案内されるや否や驚いて叫んだ。何故な豪華な調度品に囲まれた広い部屋そこにいたのは？全裸同然の美女だった。
　近くに控えていたやはり、ほぼ全裸としか言いようのない侍女が言葉をかける
『外界の方は驚かれるのは無理もありませんが、お控えください、王妃様でいらっしゃいます』
　パドマ、「えっ！この裸の女の人が王妃様？？？！」

　そう答たのは、これまた一糸まとわぬ美女だった。

　王妃は思ったよりもまだ若そうだ2・・・6か7歳位か？小麦色の肌に黒い髪と瞳をしたエキゾチックな美女だ。だがこれは・・・。幾つか豪華な宝石や貴金属のアクセサリーや飾り布を身につけていた。口元に白いベールをつけていた。

　しかし衣服と呼べる様な物は、一切身につけてにいなかった。大きな乳房も尻も、そして一番隠さないといけないはずの性器さえ丸出しだった。全裸に僅かな装身具を身につけただけの美女が、羞恥心のかけらもなくそれどころか、裸でいる事を寧ろ誇らしげにして、優雅な微笑みを浮かべながら迎え入れてくれた

この部屋に控えている侍女達は皆、皆、全裸又は全裸同然の姿だった。その為か、わずかといえ、装身具を身につけている王妃の姿は、かなり目立つ。
パドマは、まるでユデダコの様に顔を真っ赤にして、じろじろと王妃の全身を上から下まで見る。まるで女の子の様な姿でもやっぱり思春期に差し掛かり始めた男の子、エッチな事に興味深々なのだ！パドマの皮に包まれた小さな、子供、子共したおちんちんはズボンの中で自己主張している。

特に王妃の股間に目がいく。
股間には一本の毛も無く、その代り三日月の絵があった。
（あの絵は、なんだろう？月いや三日月かな？）

王妃「驚きましたか？裸は、ハーレムの女奴隷（オダリスク）の正装ですわ！」
王妃は微笑む。
（で、でもなんで裸が正装？？？）とパドマは思った。それを察したようで王妃は言う。
「うふふふ！裸なのは自然な事ですわ！理由は元々この国の王家が発生した地域の伝統です。王宮では女は王妃から奴隷まで全員裸になるのが正装だからです。まぁ今は、一般人の女性はそんな事は致しません。侍女たちも後宮（ハーレム）の中だけ、何処へでも裸でいられるのは、王や王太子の寵愛をうける特別な奴隷ですわ」
王妃は、優しい声で嬉しそうに語る。
「」
王妃の言葉は力ら強く、誇りに満ちている。事実、王妃は、王の奴隷であることに心から感謝している。

「私たちと羊やラクダと違うのは、人の言葉を話せるかどうか？だけ、ですわ！家畜が服を身につけていたら可笑しいでしょ？」
「もちろん、貴方のお友達二人、ミカエラもマラティもよ！」
「！！！？？？」絶句する。二人が獣みたいに裸で・・・？と
「うふふっ、あの二人は、もう王子さまの寵愛を受ける特別なペットなんだから何時でも何処でもスッポンポンよ？　とても名誉な事だわ」
「で、でもぉ、あ、アレン、アレン君がぁ・・・。」全裸の女達を前に色々と複雑な感情で混乱しながら言う。
「アレン君は貴方も知っての通り、可哀想な目にあって大事なおちんちんを切り落とされてしまったわ。もうあの子は、もう既に男の子ではないわ！だからこの応接室等以外は、男子規制このハーレムにいられるのよ」

　そして、王妃は、本当に申し訳なさそうな顔でパドマに言った。
「今日貴方をお呼びしたのは、その事でお願いがありまして」
　パドマは驚く。
「えっ？その事？てなんですか？それに王妃様なら命令できるのではありませんか？」
　彼女は困ったような表情で
「王妃様なんて呼ばれていますが、ハーレムの外には、なんの権限もないんですよ。ハーレムの女は皆、王の奴隷！つまり王に飼われている家畜ですわ！あくまでも私は、ただの奴隷。王太子の母という立場があるのでそう呼ばれているだけですわ。王妃なんてただのあだ名の様なものですわ。身分はハーレムの一番上ですが、国民のだれよりも下なのです。」
　そして王妃というあだ名の、裸の女奴隷は、意を決した顔で爆弾

のよう一言を発した。

王妃「宦官になって私の王子にお仕えして欲しいの」

しばらくの沈黙、そして
パドマ「王子様に使えるのはいいのですが、宦官て、なんですか？」男の娘は問い返した。
しばし肩すかしを食ったような課をした王妃は口を開く

王妃「ハーレムの中のことをする役人ですわ！でも女しかいない所なので男手も必要なのだけど、成り手がいなくてねぇ」
「どうしてですか？」
「ハーレムに入る事が出来る男は、王と王太子のみですわ。」
「そう言うところで働く以上、男の子を辞めていただかないと・・・。」
「「？？？」」
「あのぉ、そのぉ、・・・・。」王妃は、ばつが悪そうだ。
「このハーレムは王族の子をなすためにあります。そこで他の男の血が入ら無いようにしないといけません。そこで貴方には、出仕するのにあたって、子種を取る手術を受けてほしいのです・・・。」
「こ、子種というのは・・・もしかして・・・？」
パドマは、脅えた様な声で答えた。

王妃は、優しく、そして威厳に満ちた声で話す「そうです！パドマ！貴方には、この国の繁栄の為、男の子の大事なタマタマを王家に捧げてほしいのです。」
「なっ、なんだってぇ〜〜！！！」少年は目をむいて叫んだ！顔をは真っ青だ。

「だぁっ、大丈夫ですわ！貴方のお友達のアレン君。あの子みたいに、おちんちんまで切るのでは、有りませんわっ！

おちんちんは、貴方の場合は、おちんちんだけは、特別に残しておいて差し上げます！

元々、我が国の宦官は、その者の身分や立場等を考慮して、おちんちんは、残しておいても良い事になっていますわ」。

「自己志願者の場合や、それなりに身分のある人物が宦官になる時は、タマタマさえ取ればよいのです。

睾丸だけではなく、オチンチンまで取るのは、高貴な身分にない者や外国人、戦時捕虜と犯罪者です。

貴方の場合外国人ですから本来はダメなのですが、王のお客様という事で、高貴な身分の者として遇する事が出来ました。これはとっても幸運な事ですわ！！！」

パドマ少年は、疑わしげな表情で睨む、しっかり両手で大事な所をかばいながら・・・・もちろん王妃を筆頭に周りの全裸の美女達のせいで幼い陰茎ははちきれんばかりである。

「大丈夫ですわ！手術は痛く無いよう麻酔薬を使いますし・・・。あと貴方のオチンチンは包茎でしょう？ついでに割礼として、おちんちんの先を包んでいる皮も切り取りましょう！本来、割礼は麻酔無しでするけどサービスですわ！」

「どっちでも嫌ですよ！！！ぼくこれ取るの、嫌です」涙ながらに言う

『大丈夫、手術は、痛く無いし怖くもありませんわ！お薬で眠っている間に終わりますわ』

「坊や、貴方の大事なモノと引き換えに王宮の暮らしを約束しましょう」

パドマは泣きながら「やだぁ！！！ぼく、女の子になるなんてぇ、やだぁ！」

　王妃はオロオロしながら言う

「お、女の子になるのでは、ありませんわぁっ！ハ、ハーレムの中は誘惑でいっぱいですわ！王家の血の正当性を保障する為に貴方には大変申し訳ないのだけれど、アレン君と同様に子を作る能力を失っていただかないといけませんわ！それに対する償いはきちんといたしますわ！」

　パドマは脅えた様にして、ぐずっている。

　王妃は困り顔だったが、何か閃いた様だ。

「そ、それならば玉抜き手術を受ければ、何人か女の子を差し上げましょう！！！まず手付に、この娘を差し上げましょう。」そう言うと王妃は、隣にいた一人の女奴隷（オダリスク）の腕を掴んだ。「えっ」その女奴隷はかなり驚いたようだ。

　その女奴隷は、王妃と同年代だろうか？

　王妃同様に裸である。だが王妃が装身具等を着けているがこの女奴隷（オダリスク）は、まったくの全裸だ！何も、ほんとうに何も身につけていない！生まれたままの真っ裸だった。

　かなり長身でグラマラスだ。特に驚くのは長い髪をポニーテールにしているが、髪の色は純粋な白だ。肌も雪の様に白い。見るからに気弱そうな顔だちと立ち居振る舞いである。やや猫背ぎみだ。

　「この子は白百合、私と同じ日にここに来て、同じ日に割礼をされたのよ！でもまだ一度も陛下から御呼びがかからないのよ。だ

からこの年で生粋の処女のままなのよ？ねっ！凄いと思わない？普通１８歳くらい、遅くても２０歳までに陛下の御夜伽に呼ばれなければ、王様が功績のあった家臣に褒美の品物として送られるか、大事な客様への土産品にされるの！処女の奴隷は子どもを産ませる他にもいろいろ役に立つわ」

「この娘は、けして陛下に呼ばれる事もプレゼントの品物にもなれないわ、なのに未だに処女を護ってるのよ？」
「そうなれば普通の女奴隷ならさっさと諦めてしまうわ！処女膜も、あってもしょうがないから、さっさと厨房からくすねてきたキュウリとか、突っ込んじゃうんだけどね。それまで我慢していた反動なのか、凄い勢いでいやらしい遊びにふけったりするし、ほぼ全員がレズビアンに溺れるのに、この白百合は、違うわ！オナニーの経験すらないわ！身持ちが固い娘なのよ！貴方の個人所有の女奴隷（オダリスク）にしていいわ！オチンチンは、残っているのだから存分に楽しむといいわ！貴方のオチンチンでこの白百合の処女を貫いてあげて」

　パドマは脅えながら想像してしまった。
王宮の一室でこの白髪の美女と・・・そして。パドマは苦しそうな顔になり。
「うぐっ！」呻いた。
「あらあら！まあまあ！我慢できずに、子種を漏らしてしまわれたようですね？取りあえずこのお話はここまでといたしましょう。」
そう言った。

パドマ去勢の前日譚1

ここは、ハーレムの中の水風呂、それなりに豪華な調度品に囲まれている。そこに全裸の女性三人とこちらも全裸の元男の子がいた。

一人は、20代後半の長い黒のグラマラスな美女。
彼女は、小麦色の肌を覆う布はなく、普段身につけている豪華な装身具すら身につけていなかった。
それは、この時代、世界的覇権を握る国の少女も南アジア人の少女も同じだった。
理由は、南アジア人の少女の口から発せられた。

漆黒の髪と瞳に褐色の肌をしたグラマラスな少女は、声を上げた。
「うわ～、疲れたぁ～。寵姫って王子さまとの子作り以外、する事なんて無いと思っていたけど、王妃様自ら王宮の掃除とか、したり、裸なの以外は、というか裸のメイドさんですよね。それに毎こんなにハードな踊りの練習をするのだったなんて。」

王妃と呼ばれた女性は、「そうね、私達は、王侯の妻ではないわ！その王侯の私は国王陛下の、貴女達は王子様の所有物ですわ！ですから、妻ではなくて、あくまでも私達は、王族の寵愛を受けていているだけの女奴隷なのよ。私達は、基本、王族の侍女なのよね。だから掃除、洗濯、料理もすることもありますわ。」

マラティは、まだ納得いかないようだ。
「う～ん、まぁ家事をするのはいいんですけど、何時も裸なのは・・・、恥ずかしくて辛いわ。」
となりで水に浸かっていた、まるで妖精の様な美少女。ミカエラは、青みがかった長い、長い銀色をした髪をほどかれプールの水に広がっている。そして雪のように白い細身の身体は水の中に沈んでいる。
「そう？マラティまだ裸は嫌なの？私は、むしろ裸でいるのは、好きよ！そりゃ、裸なのは今も恥ずかしいけど、それ以上に解放感がいいのよねぇ～。それにあるがままの自分でいられるのよね！私には家事の方がつらいわ」
マラティは、そんなミカエラに振り向くドタプンと大きな乳房が水の中に浮かんで揺れる。
「うーんミカエラはそうよね～家事はメイドさんがしてくれてたものね！」
そんあ揺れるマラティの胸と自分の揺れない胸を見比べて嫉妬交じりの目でマラティを見る。
「そうよ！元とは言え、お嬢様なのよ！私は！それが今じゃ遠い異国の地で囚われの身のペットだものねぇ」
言葉とは裏腹に、ミカエラは、嬉しそうだ。人ではなくなった事で何もかも重荷が消えたのが嬉しいのだ。

ふとマラティは、呟いた「パドマ君の事が心配。今一人でどうしているのだろう？」
ミカエラは、複雑な表情で答えた「そうね！貴女達ふたりが故郷を

離れる事になったのは、私達の巻き沿いなのだし、責任を感じるわ」

マラティは、ミカエラに提案した「では、パドマをここに呼んで一緒に暮らしましょう？アレン君も喜ぶわ！」

王妃「お待ちなさい！皆さんパドマ君は、確か男の子ですよね？ここは限られた人物以外の男は、立ち入り禁止すわ！」

マラティ「王妃様ではどうすれば？」

「方法は一つだけですわ！」

ミカエラは尋ねる。「それはなんですか？」

「それはですね、このハーレムの一員になって、いただくには、パドマ君には、可哀想な事ですが、男の子では、なくなっていただく他にありませんわ」

王妃は、答えた。

マラティは、はっ！と気づいた「男の子では、はなくなる。つまり・・・・“男の子の大事な所”を・・・・」ぞぞっー背中に寒気が走る。別に水の中で寒くなったのではない、外の灼熱の太陽にあてられた水は十分暖かい。自分は、何という恐ろしい事を言ったのだろう。

「はい、そうですわ！貴女方、寵姫達は大体裸同然。そのような中で正気を保てる男の子はおりませんわ。ですから、不埒な真似を絶対にできない身体になってもらう他ありませんわ！」

マラティは質問と言うよりも確認した「つまりパドマ君のを・・・。ちょん切るしかのですか？アレン君がされた様に」
王妃は告げた「でも、そんな残酷な事は、流石にしたくはありませんわ！男の子が大事なモノを失うのは、女の私達には想像もできない程の苦しみですわ！ねぇ、アレン君？」

アレンは、ミカエラにしなだれかかってたいきなり質問を振られて少し慌てた様だ。
「あっ！？ひゃい、僕は、男の子じゃなくなって辛いか？と王妃様は尋ねられたのですか？」
「そうですよアレン君。ミカエラの肌に夢中のようでしたけど」

アレンは、恥ずかしそうに、立ち上がり、王妃の前で直立する。アレンの股間が王妃の眼前に来る。本来なければならない男性器官があるはずの所には、目を背けたくなるようなひどい傷跡がある。暴徒により、焼き切られたのだ。
元々、女性的な少年は、睾丸を失い男性ホルモンが作られなくなったせいもあり、さらに女性的な容貌になっていた。

「辛いです。と答えます。」
王妃はどうしてと尋ねた。
「だってまだ、僕。オシッコをする時に、男の子だって時の癖で立ったままでしようとしてしまうんですよ！なんとか慣れてきたと思っていたのですけどね。自分がもう男の子じゃないのに・・・・うっ、ぐす、」アレンは、泣き出してしまう。

流石に王妃もあやまった。
「辛い事を言わせてごめんなさいね。アレン君。」
「ミカエラ！マラティ！男の子にとって“オチンチン”や“タマタマ”が、どれほど大切なモノかなんて、股間に“オチンチン”と“タマタマ”を両方共もブラ下げていない身体である女の身で、軽々しく話してよい物ではありませんわ！」

目を赤くしたアレンが王妃たちに言った。
「王妃さま、男の子じゃなくなったのは、辛い事が多いです。おちんちんがこんなにも短くなってしまったら立ってオシッコが出来ないのは屈辱です。このハーレムには、王妃様みたいな綺麗な女の人や、可愛い女の子がいます。そんな人達が何時も裸でいるんですよ？」
アレンは頬をそめて恥ずかしのを我慢してオズオズと言う
「そのぉ、僕・・・。僕、もう、男の子じゃないのに・・・・。凄くエッチな気分になっちゃうんです・・・・。」

王妃は苦笑した。
ミカエラは悲しそうな雰囲気だ。
そして、マラティは、あっ！と、いう顔をして腕で肝心な所を隠した。

「それは、辛いわね？去勢されると性欲がなくなる事も有るんだけど、レン君は、エッチな心が残ってしまったのですね？」
アレンは吐き出すように叫ぶ
「はい！欲望が処理できなくて辛いです。おもっきり出したいですぅ〜〜！」

アレンは、続けて「でも。これでよかった、と思う事もあるんです。ミカエラおねぇちゃんと間違いを犯さなくて済んだことです。」

「アレン君・・・・」悲し気に呟くミカエラ

王妃は思い出す「そうでしたわね！お二人は、母親が違うけれども、姉弟。どんなに愛し合っていても決して結ばれてはいけない関係・・・。」

ミカエラは王妃に答える
「あの騒ぎが無ければ、私達は、たぶん最後まで・・・・。」
王妃は、涙にくれるアレンとミカエラをそっと抱き寄せた。
「それは・・・アレン君・・・それは確かにオチンチンを切り落としてしまうには、十分なモノね。せめてもの救いは、一線を超えないうちだった事・・・。」

アレンは、泣きながら
「僕は、今も、ミカエラおねぇちゃんの事が、好きで、好きでたまらない！今もエッチがしたくてたまらないです。でも、もう僕は、男の子じゃなくなってしまったから・・・。」

王妃は強い口調で慰める。
「そうですわ！貴方は、もう男の子ではないわ！ですが、運よく切り落とされる前に、逃げる事ができていたらと、何時も思いますわ！ミカエラは、王子様の寵姫になる、そして、アレン君、貴方は宦官になる定めですが、自分の意志でオチンチンを取る決断をしていただければ、痛くないように麻酔をして宦官になる手術をしたことでしょう。」

「宦官は決まりですか？」
王妃は優しく言う
「可哀想ですが、貴方の様な異民族の美しい少年奴隷を手に入れたら去勢してペットにするのはしきたりですわ」
アレンは、寂しそうに答えた。
「そうですよね。ミカエラおねぇちゃんと一緒にいるには、もうこの方法しかないんですよね。」

遠くの国の後宮で姉は寵姫に、弟は去勢される。そして姉弟は奴隷に。
そう！この方法しかないのだ。アレンとミカエラが共にいる為には。
どの道、離ればなれになるさだめならいっそ異国で虜の身になる。
にアレンは、ミカエラは、運よく姉弟も一線を超える事無く過ごせがそれも一時期の事。二人は成長しそれも無理になった。共に地獄に落ちるか。そんな思いは突然外部の力で叩き潰された。

パドマ去勢の前日譚2

「さてどうしたものでしょうねぇ」
先程まで水風呂に居た王妃は、今は、部屋で一人呟く、身につけているん物は、乳房を重力から守る為と美しく見せるカップレスのブラに豪華な装身具だ。グラマラスな小麦色の肌はほぼ全て晒されている。
「アレン君達の手前、オチンチンを切るのは可哀想と言ったけど。・・・・・。」
王妃は複雑な感情だ。勿論、去勢などするのは、気が引ける所があるのは確かだ。
だが。

アレンとパドマと言う普通では手に入らない美少年2人を去勢して後宮のペットとして飼う。何という心躍る話だろうか。

王妃は、パドマが去勢される光景を想像した。
じゅうぅぅぅ
「あっ！」
王妃の股間には一本も毛は無い。その股間には三日月の刺青をされた、クリトリスも、ラビアもない性器がじゅるじゅると愛液を吐き出す。
「あっううう～！」
軽くイってしまったのだ。クリトリスを喪失して鈍感になったが、使いに使い込んだ性器は、加虐的な空想でイケるのだ。現代の綾子達がイクにイケないのは、まだまだ修行が足りないのだ。
「ふゅっ！あぁぁぁ」王妃は、快楽のうめき声を一人上げる。

「はぁはぁ！」乱れた呼吸を整える。
そして
「これは、何としてもパドマ君を去勢して後宮に向い入れなければ」
王妃は決心する。

広大な後宮の区画に対して寵姫の数は少ない、王妃は、少しでもかつての栄光を取り戻したいのだ。

そして、王妃は、右の人指し指と中指で膣を中からぐりぐりと刺激した。
左手で大きく美しい乳房をを鷲づかみにした。
「あっ！あっ！あっううう～！いいっ！いいの！パドマく～ん」
王妃は、無残に去勢される少年の未来を想像した。
ぐちゅ、ぎゅちゅ
歪んだ欲望で手悪さが延々とと続く。

夜伽

旧い、旧い、建物の中　全裸同然の姿で後宮を歩く３０代前半位に見える元・日本人の女性。今はこの国に帰化している。
勿論本人は望んでいなかったが。

アジア人にしては背が高く、艶やかな黒髪を後頭部で纏めている。王の夜伽の場にむかう綾子。グラマラスで見事な肢体は、ほぼほぼ全裸に近い。

全裸に近い格好をしているのは、これから夜伽をおこなう為ではない。普段から例外はあるものの裸同然の恰好で生活しているのだ。なぜなら綾子達は奴隷だからだ。服など自由に着られる身分でもないのだ。それに加えこの国の王の祖先は裸族の文化圏から今の場所に移り住んできたらしい。その少し慣習が残っているらしい。

裸同然の女奴隷の綾子は後宮を歩きながら考える。
ミカエラとマラティの二人はこのハーレムで、どんな　性　生活を送ったのだろう?
囚われの未亡人は、１００年以上前にここで暮らしたであろう少女達の性生活に思いをはせた。
綾子達同様、割礼で女として不完全な身体にされてしまったミカエラとマラティ。

綾子達同様、奴隷の印として股間に刺青を刻まれてしまったミカエラとマラティ。
綾子達同様、地獄のような苦痛を受けて奴隷にされたミカエラとマラティ。

自分と同様にさぞ不本意な性生活を送ったのだろうか？

こんな思いにさせられたのは、綾子は、今夜もまた夜伽に呼ばれたのだ。
既に奴隷として調教と言う名の辱めを受けて、誇りも矜持も大部分排出してしまっているが、食欲と同様に女盛りを迎えた身体は性欲も全く無くなっていないのだ。むしろ割礼でクリトリス（とラビア）を失い性欲は募るばかりだ。

綾子は、１００年前のミカエラやマラティと同様に普段から裸同然の姿であった。全裸の方がましな卑猥な格好をさせられていた。

夜伽は何時も通りだった。

綾子はわずかな装身具を残して布を取り払った。
大した違いはない。元々、肌の大半は、外気に触れていたのだ。

この国の最高権力者である国王・・・である少年というよりは、男の子と言ったほうがよいであろう。
精通を迎えたばかりの子供である。
子供であり。ついこの間まで童貞だった王に、ずっと年上の未亡人。それも・・・、割礼でクリトリスを切り取られ性感が衰えた女を満足させる等という事は、到底できないであろう。

王は、いまや、ただの女奴隷である綾子の身体で童貞を喪失した

のだが、それはまだ最近なので、女の身体の事等などまだ、ほとんど知らないのだ。まだ包容力はなく、綾子を思いやるだけの余裕もない。

　あるのは子供らしい元気さと好奇心である。綾子はある意味、玩具のようなものではないだろうか？
　それとも母親の代わりであろうか？

今宵もまた綾子は、王の子供とは思えないサイズのペニスを騎乗位で受け入れるのだ。

綾子はベッドの上に寝転び今か、今か、わくわくしている子供のペニスをまじまじと見つめる。

「（本当に大きいわぁ）」
ゴクリ！綾子は生唾を飲み込む。「（もしかしたら今夜こそ）」
綾子は期待してしまう。それが無駄であることはわかっていた。
諦めきれないのだ。オーガズムを！！
忘れられないのだ。割礼でクリトリスを失う前の事を！！

初夜に処女を捧げた亡夫に開発され、オナニーさえしたことの無かった綾子は、清らかな乙女から淫乱な娼婦のような女にされてしまったのだ。
夫を亡くした後も操を立て、男は受け入れず。女達をメイドとして侍らせ、少女達の青い性をむさぼっていた。

その報いであろうか・・・。

割礼の時。

一糸まとわぬ姿で公衆の面前立たされた。そして、雄叫びを張り上げながら右手に持ったメスを、大事なクリトリスに振り下ろしたのは・・・。

そして、クリトリスだけでは無く、歯を食いしばりながらラビアも自ら切り落としたのだ。

しかも麻酔も無しで。
自らの手で、自らの女性自身に刃物を突き立てて敏感な部分を切り裂いたのだ！！！

女が！自らの女の部分に！女の割礼をした。

これにより綾子は長年の間、【罪の芽】と呼ばれるクリトリスを自ら切り取り罪を償ったのだ。
これまで綾子を淫乱な娼婦呼ばわりしていた者達は手のひらを返した。
勇敢な女だ。貞淑な女だ。たいしたものだ、自ら割礼をするとは！
こうして綾子は、素晴らしい女奴隷。という付加価値を自らにつける事に成功した。

だが綾子が償ったのはクリトリスをつけていた事では無い。巻き込んでしまった娘達と愛人のメイド達であるのだ。どこの誰ともわからない人物の奴隷にせず。後宮で綾子の管理の下においてもらえる。あくまでも国王の愛玩動物としてだが。その為にこんな事をしたのだ。

綾子は罪を償い、娘達と愛人のメイド達の為にも義務を果たさな

ければならない。
義務とは、後宮の女奴隷に求められる事は、王を性的に満足させる事と子を成す事の２つである。
ほぼ全裸の女奴隷である綾子は、ひざまずいた。そして、三つ指をついて頭をたれる。
そして、「今宵も、わたくしめがご奉仕いたします」

大きなベッドの上にあがり綾子はクパァ！と脚を広げた。
露わになった性器は割礼済みであるだけでは無く、一切の毛が生えていないのだ！結婚する前に永久脱毛されているのだ。まあこの後宮では陰毛の処理もマナーなのだが。
それだけでは無く、大輪の紫色の牡丹の絵が書かれていた。入墨である。これは綾子が奴隷であることの印。
騎乗位は綾子達、女奴隷の最も基本的な体位である。あくまでも王に対して奉仕するのだ。

綾子は自分の手で巨大なペニスをつかみ、クリトリスもラビアもない。しかし紫の牡丹の入墨のある性器に導いていく。
大陰唇が亀頭とくっつく。そしてゆっくりと膣に混入していく。巨大なペニスは、経産婦の綾子でもきつく感じられる。
「くっ！あっ！」思わずうめく。
ズボズボォ～と根元まで入っていく。亀頭が綾子の子宮の入り口まで達する。

そうして綾子は、日々鍛錬を欠かさない身体さばきで見事なベリーダンスを開始する。
「あぁぁぁっ！あぁぁぁっ！はぁ～！くっぅぅぅっ！」
小ぶりのスイカのような美しくも巨大な乳房が揺れる。
王の極太のペニスは、経産婦の綾子の膣さえも限界まで広げてしまう。
割礼の儀式で、最も敏感なクリトリスもラビアも喪失した綾子。大事なモノ失った。だがしかし、膣はしっかりと残っているのだ。膣の壁を擦られて、押し広げられる事でまだまだ、女としての快楽を得る事ができるのだ。
「はあぁぁぁ！ごっ、ご主人様ぁぁぁ～・・・んんん！」
だが、すでにクリトリスは失われている。
それでも綾子は、少しでも快楽を得るため。
そして、このハーレムでの自分と娘達そして自分の事に巻き込んでしまったメイド達の立場を守るために、愛している訳でもない主である少年王に必死に奉仕する。
様々な角度やストロークで少年の腰の上に跨がった綾子は自らの腰を振る。美巨乳が踊る。
「（こっ、こんな事、夫にもしたことがないのに・・・。）」
綾子は、少年王の上でベリーダンスを踊っている。
時に激しく、時にゆったりと。
「ひぃっ、あぁぁっ！はぁ～！いぃぃい～」
綾子は、快楽に心を捕らわれていた。

空気が乾燥しているので汗はすぐに乾く、でなければ汗でだらだら、になっていた。

性欲の盛りを迎えた女の体はクリトリスが無いにもかかわらず、膣からの快楽で絶頂を目前にする。

だがしかし、
「んんんん！あぁ、綾子・・・んくっ！ぐっあぁぁぁぁ！！！」
突然、少年王は悲鳴を上げた！
それと同時に、綾子の肉壷にくわえ込まれた巨大なペニス。
もちろん、割礼により包皮は切り取られている。は爆発した！

綾子は、子宮の奥に熱いものが叩き付けられた事を感じた。

そうすると少年の綾子の膣をギチギチと限界まで広げそして激しく突き刺していたペニスの動きが止まってしまったのだ。少年王は、はぁ、はぁ、と息を乱していた

そして、綾子の膣の奥の奥にある子宮めがけて若い粘り気のある大量の子種が注ぎ込まれた。
綾子は快楽に酔いしれていたがストロークが無くなり事の次第に気づく。

今宵もまた、女盛りを迎えた未亡人の体は、快楽をむさぼる事はできるが、オルガズムに達する事はなかったのである。
蛇の生殺し状態。割礼でクリトリスを喪失して以来、ずっとこの調子である。
「（まっ、またなのっ！？）」

綾子は、涙があふれてきた。それは頬を伝うのだ！

小年王はそれを見て「綾子！どうしたのだ？なぜ泣いている？」

と心配そうに語りかけてきた。

「はい！いえっ！綾子は！綾子は！国王陛下の子種を注いで頂いたことが嬉しくて泣いてしまいました」

無理をして満面の笑顔を作り心にも無い事をいう綾子。

「（このっ！くそぉ、がきぃぃ！あと少しだったのにぃぃぃ）」内心は性的な理由で怒りと欲求不満でいっぱいだった。内心は般若の形相だった。だが、表向きの笑顔は崩さなかった。

王の不興をかえばどの様な恐ろしいことが待っているか分からない。

「そうか！そんなに嬉しかったのか！」

少年王は、こちらは素直な笑顔で応じた。

そして小年王は綾子を抱きしめる。まだ体は、綾子の方が大きいので、綾子が抱きしめているといった方がいいかもしれない。

「綾子、私は、お前を心から愛しているよ！」そして綾子の唇をむさぼるように激しい口づけをする。

「「あっゅ、ぷちゅぅ、くちゅうっ、クチュウ」」

舌が軟体動物のように絡み合う。

それから少年王は優しく言った

「よい子を生んでくれよ。」

だが綾子には死刑と言われたような気分だった。全身に鳥肌がたつのがわかった

そう、綾子はただこの少年の性欲解消の為だけにいるわけでは無い。
王家の血を残す。その為にいるのだ。だからこそ一切の避妊行為はしていない。
このままではいずれ妊娠してしまう。自分だけではない。メイド達も夜伽に呼ばれているのだ！
こんなガキの子孫繁栄に貢献しなければならないのは嫌だ！だがしかし、綾子達に選択県はない。
綾子は自分達の呪われた運命に対して顔では満面の笑みを・・・。身体は股間からは愛液と精液を垂れ流して、心は涙を流していた。
それから王とその奴隷は2度目の『子作り』に取りかかるのだった。
王は愛しい綾子を豪華なベットに寝かせてのしかかる。巨大なペニスを綾子の割礼で半壊した性器に突き込む。そして腰を振る。愛情からそうしているのだ。
綾子からしてみればオゾマシイ肉棒を突きこまれたのだ。
「（こ、こらえなければ・・・。）」
組み敷かれた綾子は、少年王が射精するのをむなしく待つしかないのだ！
それがクリトリスを割礼された女の運命（さだめ）なのかもしれない。